

日本醫史學雜誌

第14卷 第3号

昭和43年11月25日発行

原 著

嶺春泰伝……………緒方 富雄…(1)

典藥諸家の概説

その一家福井家について……………羽倉 敬尚…(50)

例 会 記 事……………(58)

雑 報……………(63)

通 卷 第 1373 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京15250番

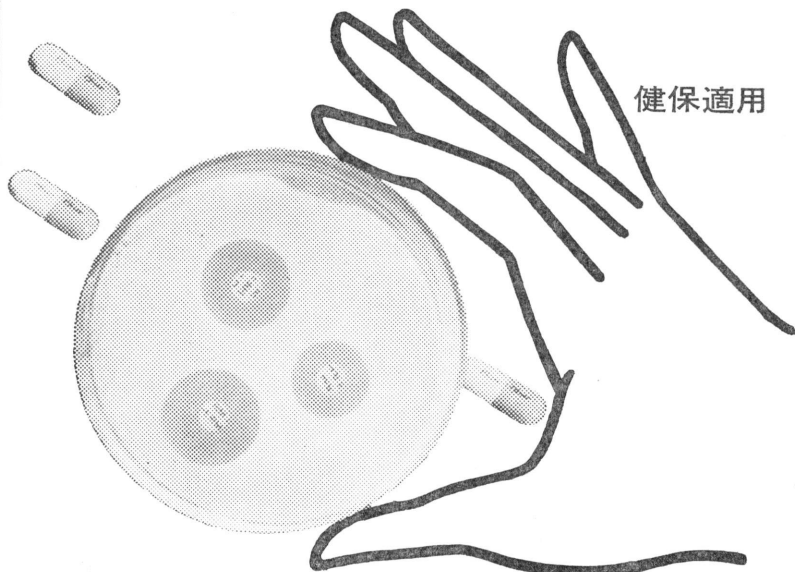
1日600mgの時代です！

従来のテトラサイクリンに広さと深みが加わりました

広範囲抗生物質 Methacycline hydrochloride

ロンドマイシン カプセル

- 呼吸器感染症、消化器感染症などに優れた治療効果が得られる
- 1日600mg2分服で有効、吸収が速かで高血中濃度が長時間持続する
- 胃腸障害が少なく、光線過敏症も報告されていない
- 健保薬価：1カプセル ￥57.00



* 科学は世界の向上のために—医学は人間の幸せのために



台糖ファイザー株式会社

東京都中央区日本橋通2の2 TEL (272) 6661

嶺春泰伝

緒方富雄

Shuntai Mine — A Biographical Note

Tomio Ogata

目次

- 一、ことのおこり
 - 二、嶺氏の系譜
 - 三、嶺氏の祖先
 - 四、嶺春安
 - 五、嶺春泰
 - 六、春泰の医学と蘭学
 - 七、春泰の死
 - 八、嶺春泰先生之碑
 - 九、春泰の蔵書目録
 - 一〇、春泰と玄真
 - 一一、春泰の蘭語
 - 一二、春泰関係文書（蘭語文書を除く）
 - 一三、春泰の性格
 - 一四、春泰の交友
 - 一五、春泰の家計
 - 一六、春泰の子孫
 - 一七、むすび
- 嶺春泰年譜

一、はつのおこり

杉田玄白の「蘭学事始」につぎの一節がある（岩波文庫本より）。

「過ぎこしかたを顧るに、未だ新書の卒業に至らざるの前に、かの如く勉勵すること両三年も過ぎしに、漸くその事体も弁ずるやうになるに随ひ、次第に蔗を啜むが如くにて、その甘味に喰ひつき、これにて千古の語も解け、その筋たしかに弁へ得しことに至るの楽しく、会集の期日は、前日より夜の明るるを待ちかね、兎女子の祭見にゆくの心地せり。さて、都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞き伝へ、雷同して社中へ入り来りしものもありたり。その時の人々を思ふに、遂ぐるも遂げざるも、今はみな鬼録上の人のみ多し。嶺春泰、烏山松円といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。同僚淳庵なども新書上木後なりけれども、五十に満たずして世を早うせり。そのころ往来せし者にて、今に生き残りしは、翁などよりは、はるか歳下の人なれども、弘前の医官桐山正哲までなり。またその頃この業の着実なるを知れるものは格別、たえて知らざるものは、大いに怪しみ疑ふもの多かりき。さて集り来りたる者の内にも、その業のはかばかしからず、それと突き留めもなき面倒なることゆゑ、遂に精力尽きはて、または今日の生計に逐はるゝ人はそのしるし見えざるに倦み、且つは已むを得ず中道にして廃するといへる族も多かりき。またはたまたま志の厚かりし者も、多病にして事ならず、早世せしもあまたありたり。」

「蘭学事始」のこの部分に出てくる三人の人物、嶺春泰、烏山松円、桐山正哲のうち、烏山松円については、いまだに全くわからないが、桐山正哲については、近年になって羽賀与七郎、松木明知氏等によつてくわしくわかつてきた（羽賀与七郎「桐山家について」主として桐山正哲永世」日本医学雑誌第十二卷第二・三号、昭和三十九年二月、松木明知「弘前藩士桐山正哲と解体新書」津軽医史、第四号、昭和三十九年一月）。

嶺春泰については、宇田川槐園の撰した「嶺春泰先生之碑」がほとんど唯一の資料で、ほかに片倉鶴陵が「青囊瑣探」のなかで、春泰の側面に触れているのがあるだけである。

たまたま昭和四十二年（一九六七）のはじめ、紹介してくださる人があって、嶺家の当主卓二氏が春泰関係の文書を保存しておられて、わたくしの研究に供してもよいというはなしをうかがった。わたくしは「蘭学事始」に出てくる人物の

一人として、まだよく知られていない春泰のことがあきらかになれば、蘭学史にとつての大きな寄与であると考えたので、すゝんで、その文書を拝見したいことを申し出た。それで、わたくしは三月二十七日午後嶺卓二氏の訪問をうけ、嶺家に伝わる文書を拝見した。氏は現在東京大学教養学部 of 英文学の教授である。教授は嶺家に伝わる文書を全部お持ちになって、自分はこの方面は全く不案内なので、よろしいようにおしらべくださいと、その全部をおいていかれた。

わたくしは、春泰をめぐる環境の基礎知識が不十分なので、この雑乱な資料をどの程度まで整理できるかわかりませんが、春泰関係の未知の文書を世に紹介するだけでも意義があるでしょうということ、卓二氏は、それで結構ですといわれ、調査結果の発表の自由もこころよく許された。

拝借した書類をしらべてみると、まとまったものはすくなく、書付の類が大部分である。春泰以後の代々の関係文書もたくさんまじっている。春泰の子松太郎も、のちに俊泰、さらに春泰と称したので、親子ふたりの春泰のどちらの関係文書の鑑別のむずかしいものもすくなくない。それで現在の段階では、確実とおもわれる資料だけにもとづいてまとめるよりほかない。この春泰伝は、このような事情と背景でできたものである。

二、嶺氏の系譜

嶺家に系図が二種伝わっている。

「略系図」は、春泰の父春安からはじまっている。それによると、嶺氏は、それまですでに十数代にわたる医家である。

左に「略系図」を多少整備し、西暦その他を入れて、通覧に便にしたものをかかげる。整備、補修の箇所はいちいち示さない。

紀昌良

嶺春安

宝永元年（一七〇四）
生（推定）
宝曆七年（一七五七）
十二月八日没（五十才）

（初代）
觀あきら

幼名 桑五郎
字 子光 嶺春泰

延享三年（一七四六）

生

寛政五年（一七九三）

十月六日没（四十八才）

善六

好問 勅使河原養子

邦昌

昌之助

遠藤清三郎養子
後離別

女子

早世

女子

早世

（二代）
保光

幼名 松太郎
改 俊泰
また 春泰

天明元年（一七八一）

六月十六日生

天保七年（一八三六）

六月十三日没

（五十七才）

（三代）
養とむ

女子

早世

幼名 桑五郎
更名 春安（俊安）

尚改 新弥

文化十一年（一八一四）

生

嘉永四年（一八五〇）

五月没（三十八才）

女子

松平大和守様御領分

五料宿百姓

定右衛門養女

女子

小熊三吉正師妻

文政七年（一八二四）生

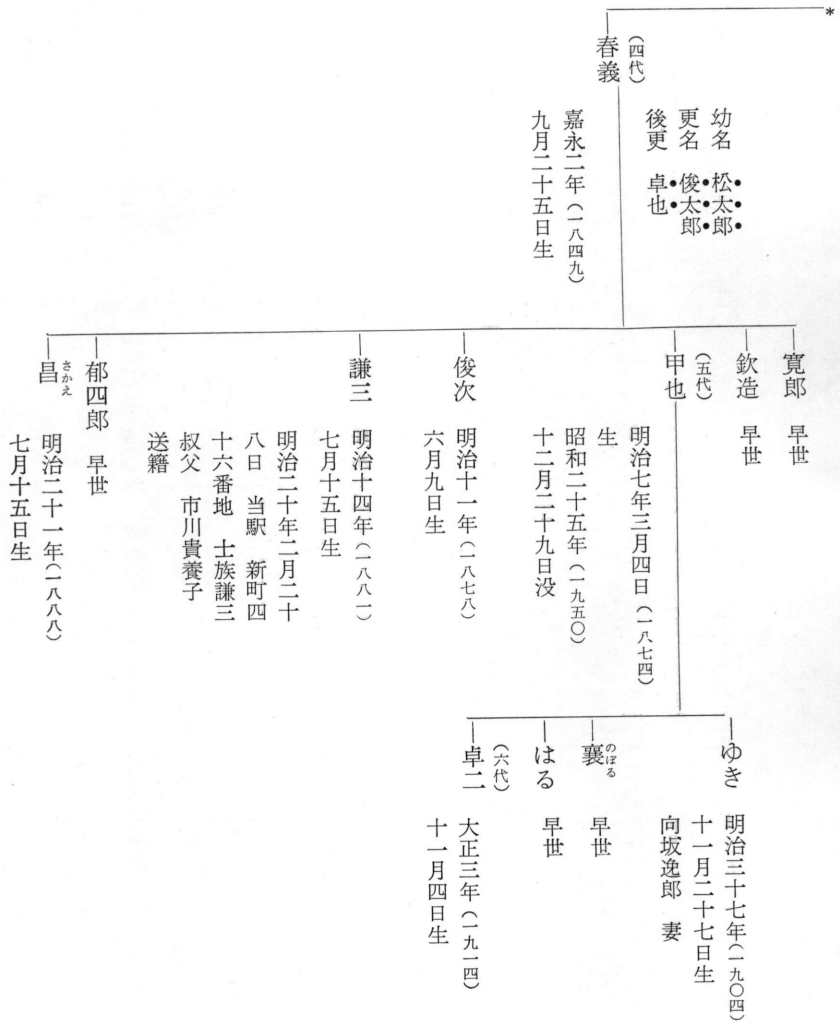
梅吉

内田通藏養子

正三郎

文政十一年（一八二八）生

*



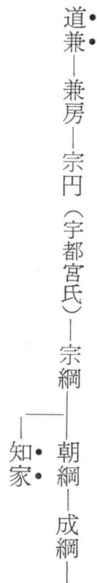
三、嶺氏の祖先

嶺氏の祖先のことは、もう一つの系図にある。表題はないが、宇都宮氏の系図で、ここから嶺氏につながる。その冒頭はつぎの文ではじまる。

宇都宮 藤原姓

粟田関白道兼公玄孫。八田権頭宗綱。其子。嫡子号宇都宮弥三郎朝綱。二男号八田四郎知家。此為常州小田大祖。知家実者源義朝之子也。由是改藤原氏。後本姓源氏。

この系図によると、嶺氏は北家藤原氏から出た藤原道兼（粟田関白）の子孫宇都宮氏の後である。成書によって、知家とのあいだの世代をつなぐと、つぎのようになる。



系図によると、知家は実は源義朝の子であるので、藤原氏から源氏にかえり、常州小田氏の祖となった。系図は、知家から十五代の子孫氏治にとんで、昌治につづく。氏治は小田讚岐守入道天菴。昌治ははじめ小田右京亮、のち嶺丹後守と改めた。これが嶺氏の始祖である。昌治のところに、つぎの注がある。はじめに「同国」とあるのは「常州」である。

母、同国直壁城主氏幹入道平道夢姉也。右京亮出生後。北條相模守氏直以伯母嫁。父氏治。後生二男。依之与実母共去小田城。叔父氏幹之至館為客。扶助五千石。天正中平道夢密通佐竹義重。雖叛。小田天菴昌治不為同意。辞禄而則長岡

嶺氏の家紋は、もともと三つ巴で、三つの頭部から出る尾部が向って右へまわっている「三頭左巴」である。藤原氏の流れをくむ宇都宮氏の家紋である。ところが現在の嶺家は、巴の字を三つ円のなかにおさめたものを家紋としている。巴紋の変形であるが、類形がすくない。



四、嶺 春 安

嶺春安は春泰の父である。

嶺家に、いくつかの「由緒書」がのこっている。由緒書は、藩侯に仕えたものの履歴書で、自分ばかりでなく、藩侯に仕えた最初の代からのものを、時代を追って、藩侯別にしろしたものである。したがって、勤め向きのことに関するかぎり、正確にわかるので、この「由緒書」から、春安の履歴をさぐることができるのである。

春安の生年月日を記録した文書はのこっていないが、没年と行年とから逆算すると、生年は宝永元年甲申（元禄十七年三月に改元、一七〇四）になる。本国は常州で、真壁で生まれた。真壁は祖先昌治の母方の家族が住んでいた地である。

春安は、はじめ紀昌良と称し、のち嶺春安と改めた。延享三年丙寅（一七四六）四十三歳のとき、高崎藩主松平輝親（成善院）に召されて侍医となり、十五人扶持、薬種料銀十枚をたまわった。

由緒書に「先主無御座候」と書いてあるから、春安はそれまで誰にも仕えずに町医者をしていたようである。春安は、高崎侯に召しかかえられたときから高崎に移り住んだ。宝暦二年壬申（一七五三）つぎの藩主松平輝高（靈台院）の代に五人扶持加増。宝暦七年丁丑（一七五七）高崎勝手を仰付けられ、二十人扶持に増した。この年十二月八日、春安は十二年間仕えて五十四歳で高崎で没した。

春安については、これよりくわしくはわからない。由緒書によると、春安の手控がいつのころか類焼によって失われてしまったからである。

五、嶺 春 泰

春安に三男二女があった。その長男が観（あきら）で、これがのちの春泰である。次男が好問、三男が邦昌。女子はふたりとも早世した。春泰は、父春安が高崎侯の侍医となった延享三年丙寅（一七四六）に高崎で生まれた。諱は観あきら。字は子光。幼名は糸五郎。のち春泰と号したのである。

父春安がなくなった宝暦七年丁丑（一七五七）には、春泰はわずか十二歳で、まだ藩侯松平輝高に御目見もしていなかった。しかし翌宝暦八年戊寅（一七五八）二月十八日、十三歳で家督を相続し、十人扶持をもらった。

それから四年たった十六歳のとき、宝暦十二年壬午（一七六二）に江戸勝手を仰付けられて江戸に出た。

春泰はそのころすでに、漢学がよくできたとみえる。由緒書の宝暦十二年のところに、

「同年泰竜院様当殿様御読書御相手被仰付。相勤申候

同年御殿中月次御講釈被仰付。鮎川昌達申合隔月相勤申候」

とある。

泰竜院はおそらく高崎侯の一族であろう。当殿様というのは霊台院であろう。その読書の相手をしたり、殿中で鮎川昌達と交代で、隔月に漢籍の月次講釈をするほどの学識があつたのであろう。

ひきつづいて、由緒書の翌宝暦十三年癸未（一七六三）のところに、

「同年十三癸未年春林大学頭様御門下被仰付。上ケ物等一切被下置候」

とある。春泰が十八歳のとき江戸において儒学正統の最高峰の林大学頭の門人になった。そのときの「上ケ物」も藩侯から下されたというのであるから、特に優遇されていたといえよう。

当時の林家は、林鳳岡（一六四四—一七三二）が没し、林述斎（一七六八—一八四一）があらわれるまでの中間期で、官学としての権威の落ちた時期であつたそうであるが、その社会的地位はやはり高かつたから、そこに入門することは、名誉であつたであらう。

この時代に春泰が書いたと考えられる文書に、巻紙の冒頭に「正月十日御講釈 論語微子篇」と書き、最後に「嶺春泰拝講」と書いて、論語の微子篇第六章をていねいに階書で書いたものがある。全文はのちに掲げてあるが、「長沮桀溺耦、而耕、孔子過之、使子路問津焉」にはじまり、「夫子憮然曰、鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒、與誰乎、天下有道、丘不與易也」におわる一節に句読点をつけてある。これは由緒書に、殿中での月次御講釈を命ぜられたとあることと事実がよくあう。おそらく春泰の手控であろう。そうであるとすれば、これは春泰のもっともわかりとよきの筆蹟であろう。

もうひとつ、間接にはあるが、春泰の漢学の深さを察することのできる文書がある。時代はあとになるようであるが、「古爾」と号する漢学の友から春泰にあてた手紙風のもので、かなりながい文が漢文でしたためてある。おわりに「子光

嶺君尼下 古鬲拜具」とある(二二節に全文を掲げてある)。古鬲は不明であるが、つぎの冒頭の数行から察すると、二人が前日語りあった漢学の学芸談の延長である。

「昨辱見 顧、但先生無酒以酬厚意、是為可恨也、所承吳漢之言、退而思之、如有所得、故聊撰出数条以報之、請 子光察焉、管子曰、赦者、小利而大害也、久而不勝其禍、無赦者、小害而大利也、久而不勝其福(後略)」

古鬲は赦について、諸書を引いて論じているのである。

このような書信が春泰のところへ来るといふことは、とりもなおさず、春泰の漢学の深さを物語るものとしてよいであろう。

六、春泰の医学と蘭学

「由緒書」につき四つが列記されている。西暦はわたくしが加えたものである。

明和八辛卯年(一七七二) 薬種料銀三枚被下置候

安永三甲午年十二月(一七七四) 薬種料銀七枚御加増被下置候

同五丙申年四月(一七七五) 日光御社参に付御供被仰付相勤申候

同六丁酉年六月十五日(一七七七) 御匕役仰付御薬指上申候

三番目の日光社参りの御供のことは別として、ほかの三つは、いずれも春泰の本業である医師としての活動に関係したものである。

これからわかるように、春泰は、明和八年(一七七二)よりまえから、すでに家業の医業(漢方)をおこなっていたらしく、この年二十六歳で薬種料銀三枚をいただいている。それから安永三年(一七七四)には二十九歳で薬種料銀十枚に増えた。これは父春安が召し出されたときにももらった薬種料とおなじである。ついで安永六年(一七七七)六月十

五日に、三十二歳で御ヒ役になっている。御ヒ役は侍医の筆頭で、殿様へのお薬はこの御ヒ役がさしあげるのである。このことは、春泰がそのころ医師として一家をなしていたことを物語っている。

ところで、明和八年（一七七二）といえは、その三月四日に杉田玄白等が江戸の千住骨ヶ原で腑分を見て發憤し、ターヘル・アナトミアを翻訳しはじめた年である。また安永三年（一七七四）といえは、その八月に「解体新書」五巻が刊行された年である。これよりさき安永二年（一七七三）正月には、すでに「解体約図」ができてゐる。春泰が二十六歳から二十九歳までのことである。

杉田玄白の「蘭学事始」に嶺春泰が登場するのは、ちょうどこの時期である。すなわち「さて、都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞き伝へ、雷同して社中へ入り来りしものもありたり。その時の人々を思ふに、遂ぐるも遂げざるも、今はみな鬼録上の人のみ多し。嶺春泰、烏山松円といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。」

この文から、春泰が解体新書の翻訳に関係したとするものがすくなくない。わたくしも岩波文庫の「蘭学事始」の注に、そのように書いた。しかし、春泰のそのころの職歴がここまであきらかになつてみれば、このことはもう一度考えなおしてみる必要があるとおもわれる。

蘭学事始の記述からわかるように、春泰はターヘル・アナトミアの翻訳をめぐる評判をきいて、会合に加わつた一人である。ところで、この評判はいつごろから高くなつたのであろうか。

蘭学事始のなかから、翻訳の仕事のはかどりを推定するとすれば、上の巻のおわりにちかい部分にある、つぎの一節が参考になる。

「かくの如く思ひを勞し、精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七会なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各々相集まり會議して読み合ひしに、実に不昧者くらからざるものは心とやらにて、凡そ一年余も過ごしぬれば、訳語も漸く増し、読むに随ひ自然とかの国の事態も了解する様にて、のちのちはその章句の疎きところは、一日に十行も、その余も、格別の勞苦なく解し得るやうにもなりたり。」

これをそのことばどおりに解すれば、一年あまりたったころには、なかまは、どうやら一日(一回)に原文の十行ぐらいはかどるようになっていた。いうまでもなく、それまでにかんりの量の翻訳がたまっていて、オランダ語のこともオランダのことも、だんだんわかってきていたであろう。しかし一回の「はかどり」が原文で十行というのでは、まだ十分の理解力がそなわっていたとはいえない。

一体、このころ毎回あつまった人たちは、その席でなにをしていたのであろうか。

オランダ語を理解するということが中心であったとすれば、やはり最初(あるいは初期)から関係していたものが主導的な役割をはたらしていたと見るのが自然であろう。途中から参加したものは、それに「陪席」するか、せいぜいときどき意見をのべる程度のことよりできなかったであろう。

二、三年もして、オランダ語の意味もはっきりわかるようになってくると、会合の日がたのしみになってきたというから、玄白たちの仕事のうわさがひろがってきたのは、このころからのようにも解せられる。

もう一度玄白の文を読みかえすと、

「さて、都下は浮華の風俗なれば、他の人もこれを聞き伝へ、雷同して社中へ入り来しもありたり。その時の人々を思ふに、遂ぐるも遂げざるも、今はみな鬼録上の人のみ多し。嶺春泰、烏山松円といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。」

もし、春泰がそのような時期に「社中」にはいったとすれば、ターヘル・アナトミアを翻訳して解体新書をつくりあげる仕事に関しては、陪席者以上の役はつとまらなかつたであろう。そのころオランダ語の手ほどきをうけるようでは、とてもおいつけないからである。

一方、宇田川槐園撰の碑文に、

「後知_二阿蘭之精_一。嚴于_二医事_一。從_二蘭化子_一。為_二歐邏巴之言_一。頗通_二其学_一。施_二諸治術_一。屢有_二殊効_一。」

とある。これによると、春泰は、オランダの医学が精密なのを知って、前野蘭化についてオランダ語を学んだようであ

る。そしてその学（医学）にすこぶる通じ、諸治術をほどこして、しばしば「殊効」があったという。叙述は簡潔であるが、オランダの医学を学んで、殊効ある医術をほどこせるようになったのは、解体新書を先達として、翻訳あるいは関心が外科、内科の書におよんだとき以後のことと考えるのが自然であろう。

春泰の碑文を撰した宇田川玄随は、蘭学の初期の社中で重要な人物の一人である。玄随（一七五五—一七九七）は、四十三歳で没しており、春泰より九歳若い。蘭学のなかまの事情はよく知っていたとおもわれる。ことに春泰の友人として碑文を撰するほどであるから、二人の交わりは深かったにちがいない。玄随もわかいときから漢学に深く、のち、大槻玄沢について蘭学に入ったというから、春泰ともその経歴がにている。とにかく、そのような友人の玄随が春泰のことを書いたのであるから、その内容も信頼していいであろう。ちなみに内科書翻訳の最初は、玄随がゴルテルの治療書を訳した「西説内科撰要」で、春泰の没した寛政五年（一七九三）の前年に完成し、寛政五年から刊行をはじめ、玄随の没後、文化七年（一八一〇）に完結した。

こう考えると、嶺春泰が杉田玄白等のターヘル・アナトミアの翻訳の仕事に直接に関係したということには、疑問があるが、当時春泰が多分前野蘭化についてオランダ語を熱心に勉強して、四十歳をこえたばかりの杉田玄白に深い印象をあたえたことは、事始の記述がこれを証している。

さきよのべたように、春泰は安永六年（一七七七）三十二歳で高崎侯の御ヒ役に昇格したが、そのころの春泰の西洋医学の知識がどれほど深くなっていたか、推測がつかない。解体新書刊行後わずか三年という時期に、オランダ語を通じての西洋医学の本質がどのくらい具体的に理解できたかは疑わしい。したがって、当時の春泰の医術の根本は、まだ漢方であつたにちがいない。のちに引用してあるように、安永七年（一七七八）のころ、春泰は母の病気の治療の指導を、隣家にすんでいた片倉鶴陵に求め、漢方の処方を見せてもらって、治療させることができた。これは、そのころ春泰が、蘭学による医術を、まだよく身につけていなかった傍証にもなる。

また鶴陵が「晩に阿蘭の学を好み、まさに医方を翻訳して同儕に広めんとし、業竣らずして歿す。実に惜むべきかな」

と書いているところを見ると、春泰の蘭学が熟したのは、晩年のことと解せられる。ただし、後述するように、安岡玄真が春泰の蔵書目録「継世統譜」の序のなかで、「為西洋内科之学、殆二十年于今矣」とあるから、四十八歳で没した春泰の年令から考えると、二十八歳のあたりになる。しかしわたくしは、これを漢文特有の表現と解したい。なお鶴陵が未完の翻訳というのは、ボイセン (Boysen) の五液診法の翻訳のことであろう。すくなくとも、これを含んでいることはまちがいない。五液診法とは、患者を見るととき、脈のほか「涎・唾液」「吐物」「汗」「尿」「尿」等の性質にも着眼して検査し、病根を識別するのである。

この「五液診法」の訳稿とおもわれるものは、嶺家文書のなかに見当たらない。写本も知られていない。おそらくそれほどにまとまっていなかったであろう。江馬元恭(蘭齋、春齡)(一七四七—一八三八)の「五液診法」(二卷)は、文化十三年(一八一六)の刊行で、ずっとあとである。ほかに吉雄尚賢にも同名の訳書があるようであるが(「国書総目録」、その実体の存在は不明である)。

このように、春泰には、後世に伝わる著作、訳書がない。このことが、春泰の蘭学者として知られるところのすくない理由であろう。

由緒書を見ると、春泰の禄は、天明二年壬寅(一七八二)十二月二十八日には二十人扶持、薬種料銀二十枚にあがっている(三十七歳)。寛政二年庚戌(一七九〇)十二月には薬種料銀二十五枚になった(四十五歳)。

七、春泰の死

春泰は寛政五年癸丑(一七九三)の八月のなかごろから病気になる、十月六日に江戸で没した。四十八歳であった。高崎侯には、十二歳のときから三十六年間仕えたことになる。

諡を「以德本性居士」という。

嶺家に、このときの家督相続願の控がのこっている。

跡目奉願候覚

御医師

高式拾人扶持

嶺 春泰

当丑四拾八歳

嶺 松太郎

当丑拾四歳

末
御目見不仕候

私儀当八月中旬より疫邪にて相勝不申候に付色々養生仕候へ共快無座、去月晦日より別而相勝不申。食気無御座、草臥相増、至此節本復可仕躰無御座候。若養生不相叶相果候は、実子松太郎へ跡式被下置候様奉願候。以上

寛政五癸丑十月六日

儀手振候付書判不仕候

嶺 春泰 印

日付は春泰の死んだ日になっているが、形式的なものである。「手振候付書判不仕候」と書いて捺印するのも、形式である。なお松太郎の年齢を「当丑十四歳」と書いているのは、十三歳のはずである。

春泰の遺体は本郷元町の三念寺に葬られた。しかし現在の嶺家の墓地は、多摩墓地（甲、第四区32列7番）に移され、嶺春泰、嶺甲也、嶺きく（甲也の妻）、嶺昌（甲也の弟）が葬られている。他の人々の墓は、高崎市の延養寺の墓地にある。本郷三念寺との関係は、昭和二十六年嶺甲也の戒名をつけてもらったのが最後で、それ以来絶えたそうである。「嶺春泰

先生之碑」も三念寺から多摩墓地に移された。

春泰が没したとき、十三歳の松太郎は、春泰のただひとりの子であった。碑文によると、春泰は松太郎がまだわかいのを気づかって、宇田川玄随にその将来をたのんだ。それで、春泰の未亡人は宇田川玄随にたのんで教育してもらった。藩侯も父春泰の忠勤を考慮して、松太郎に禄をあたえて、藩に仕えているものようにあつかい、役目の責任をおわせず、江戸での医学の修業を許した。

碑文によると、春泰の妻は田口氏である。別に町医師大村周齋（四十一歳）の親類書の控がある。天明三年癸卯（一七八三）三月に書いたもので、それによると、周齋の妹が春泰の妻となっており、春泰については、「松平右京亮様御師相勤罷在候」とあり、松太郎のところに、周齋の甥として「嶺春泰悻、春泰方に同居仕置在候」とあって、事実と矛盾しない。したがって、これによれば、春泰の妻は大村氏であり、松太郎の実母ということになる。田口氏との関係については、しらべる資料が見あたらない。

八、嶺春泰先生之碑

この碑のことはさきに書いたが、ここでその全文に句読点をつけてかかげる。文字が欠けて読めないところがあるが、文意は通じる。撰者は春泰の友人槐園宇田川玄随である。日付は「寛政五年歲在癸丑十月庚申六日」となっているが、上述したように、これは春泰の没した日である。もとより碑そのものは、後年に建てられたもので、内容も春泰の没後のことにおよんでいる。碑文の最初に「孝子通卿建」とある。春泰も通卿であるが、これは子松太郎であろう。最後に近く「今也母子及義故相謀建碑」とある。義故は、恩義をうけた縁故者のことである。

嶺春泰先生之碑

友人 東都 槐園宇晋撰 牛山箕勝書 孝子通卿建

嶺君諱觀。字子光。其先出于源知家十五世。知常州小田城。源氏治子嶺丹後守之後。高曾以降以医為業。父春安。延享三年丙寅庇高崎 成善公之聘。宝曆七年丁酉(丑)終于常。時君歲十二。主喪居憂。明年戊寅除服。靈台公命嗣父。後十二年壬午移居東都。入則侍說於中。出則講經於外。安永六年丁酉命為侍医。常在左右。誦古規巫每見聽用。公薨。廼事今 公。寵加累至。君温厚篤恭。好學博洽。後知阿蘭之精覈乎医事。從蘭化子。為歐邏巴之言。頗通其學。施諸治術屢有殊効。進取西医裴生所撰五診法。讀之以為。五診是診脉之外涎唾嘔吐及汗洩尿驗其物色以識病根。斯道也。和漢所未顯說。足以裨益医事也。廼欲訳而傳之。沈潛研究盖有年矣。未及脱稿。寬政五年癸丑冬十月六日罹病没。時年四十有八。葬于東都本郷三念寺 先兆所域。諡曰以德本性居士。其配田口氏生一男。時年十三。公思父之忠勤。賜祿如仕者。不責官事。以得脩業焉。君嘗從頭謂予曰。豚兒幼驗未能教訓。行將煩子如是者數矣。於是田口氏使其從予而學焉。今也母子及義故相謀建碑。使予銘之。義不可辭。則為之銘曰。蘭馨不置。永遺爾□。聊以勒石。莠言有愧。寬政五年歲在癸丑十月庚申六日

九、春泰の藏書目録

安岡玄真(一七六九—一八三四)、のちの宇田川榛齋は、春泰が没するすこしまえから、春泰の家に寄食していた。春泰が没した寛政五年(一七九三)の十月の日付で、春泰の藏書目録をつくり、「継世統譜」と題した。それに玄真の序がついていて、興味深いものであるから、全文をかかげる。序も書目も、すべてこの年二十五歳の玄真の自筆である。

継世統譜

嶺觀先生奕世仕侯英名四聞。性素温厚忠実好話人。修儒学研切之余。憂黄岐之未尽。為西洋内科之学。殆二十年于今矣。其所藏蘭籍。業已脱稿者与未脱者十数部。由令嗣幼而難繼其業。臨終属不佞曰。近蘭学益盛豪英競起。不日諸家唱西医専門必矣。今疾篤殆死。生平所勉励勤劬業將一朝敗棄。兒幼而難統。子憐吾志。戚々于斯則訳其書補其欠。一得

達吾業。且扶児之成立。則吾安枕帰黄泉。但此言以足託子云云。不佞卑陋昏愚。雖未曉一事而辱承遺託之命。豈日夜孜孜翼々不終其志乎。因藏書數卷尽記目正名。以贈令嗣。恐後來散逸空其遺宅之言云爾。

寛政癸丑十月

安岡玄真記

大意はつぎのようである。春泰先生が儒学を修めてから蘭学にうつり、内科の学に専念して二十年。所蔵の蘭書の訳稿の脱稿したものの未完のものをあわせて十数部ある。しかも嗣子はおさなくて、すぐに業がつけない。それで先生は臨終にあたって、玄真に、これからの蘭学の隆盛は必至である。わたしの訳稿をおぎない、わが子をたすけてほしい。そうすれば、自分も安心して死ねる、とたのんだ。玄真は、遺命によって、日夜勉めてはいるが、まだ目的を達しない。そこでここに春泰先生の所蔵総目録をつくって、嗣子松太郎にあたえる。それはこれらの書籍が将来散逸するのをおそれたからである……。

目録は蘭書と和漢書とに大別し、書名と冊数とを簡単に列挙したものである。うち蘭書の部に十部十三冊（うち二部三冊はあずかりもの）、和漢書の部には六十二部約百二十八冊がかかげられている。後からの記入は、墨色等のちがいで見わけることができる。

蘭書

- | | | |
|---|--------------|----------|
| 一 | アポテーク | 一冊 |
| 一 | ブカン | 一冊 |
| 一 | 内科書 | 二冊 |
| 一 | ウヲールトブーク | 二冊 |
| 一 | ウヲールトブーク | 大小
二冊 |
| 一 | ハルヘイン | 一冊 |
| 一 | ウヲールデンブーク書留メ | 一冊 |

（注）墨で消した下に「宇田川様へかへし」と読める書込みがある。
筆蹟は玄真のでない。

一 五液全書

一 算書

右藏書

小冊

一冊 一冊

一 ア、ルドアウツセン

二冊

一 窮理医学書

一冊

右 江馬春齡老より預り

支那并和書目

一 張仲景論集解叢

完

一 療治茶談 初篇

一

一 同 後篇

一

一 牛山治套

三冊

一 牛山方考

三冊

一 痘疹医統

三冊

一 聖濟惣録 帙入

八冊

一 政談

二冊

一 医宗金鑑

八冊

一 医方集要

五冊

一 産論

二冊

一 同翼

二冊

一 薬品手引草

二冊

一	導水瑣言	一冊
一	韻鏡遮中沙	一冊
一	蘭學楷梯	二冊
一	王注老子	二冊
一	老子玄覽	一冊
一	癡癩新書	二冊
一	病因指南	六冊
一	聖惠方	十二冊
一	和語本草	十卷
一	五雜俎	八冊
一	增補燈下錄	一
一	麻疹活要心法	一
一	傷寒論	一冊
一	金匱	一冊
一	中庸發揮	二冊
一	蕪沈內翰良方	四冊
一	錦囊外療秘錄	一冊
一	產家達生篇	一
一	麻疹精要	一
一	大學精要	一冊

- 一 茶事記 一冊
- 一 東門隨筆 一冊
- 一 大學定本 一冊
- 一 千金方 二冊
- 一 采覽異言 二冊
- 一 名物六帖 一冊
- 一 旧惡御仕置事 一冊
- 一 智囊 一冊
- 一 上池秘録 一冊
- 一 方函 一冊
- 一 聖濟惣録 八冊
- 一 類聚方 一冊
- 一 卷懷食鏡 一冊
- 一 吐方考 一冊
- 一 油取之書 一冊
- 一 阿蘭陀外科明鑑拔萃 一冊
- 一 傷風約言 一冊
- 一 盲道記 一冊
- 一 方彙 一冊
- 一 合類衆方矩規 一冊

(十月二十八日大澄へ返る)

(有濟かり)

一	滑川談	一冊
一	汪氏痘疹大成	一冊
一	張何方律	一冊
一	医方規矩	一冊
一	傷寒弁正	一冊
一	吐方篇	一冊
一	医事約説	一冊
一	雑治秘笈	四冊
一	經驗良方	二冊

この所蔵目録は、蘭学創始の初期に、漢方から転じて西洋医学を学んだ一医師がどのようなものを持っていたかを示しているといえよう。まずこの目録では、玄真が書いているように、蘭学が重んぜられている。目録の最初に蘭書がかかげられているのがそれを物語っている。

蘭書のなかで、目をひくのが五液全書一冊である。これが春泰の訳そうとして未完におわったホイセンの原書なのであろうか。「アポテーキ」は和蘭局方、「ハルヘイン」は「パルフェイン」で、当時有名な解剖書。「ウヤールトブーク」と「ウヤールデンブーク」とはおそらく同義で、辞書である。「ブカン」は内科書である。杉田玄白も持っていたことは、「和蘭医事問答」にある玄白の建部清庵あての最初の手紙(答書)(安永二年正月、一七七三)でわかる。

蘭学医江馬春齡(元恭、蘭齋)(一七四七—一八三八)の蔵書二部を、春泰が借りていたというのも興味がある。そのひとつ「ア、ルドアウツセン」は、わたくしには意味がわからない。「窮理医学書」はおそらく人体生理学の書である。

和漢書の部の書目の多くは、和漢医書、儒学書である。そのなかに「蘭学楷梯」「阿蘭陀外科明鑑拔萃」「采覧異言」が西洋関係の書目として目立つ。大槻玄沢の「蘭学楷梯」二冊の稿ができたのは天明三年(一七八三)九月、刊行されたのは

天明八年（一七八八）である。春泰の没した寛政五年（一七九三）までに刊行された蘭学系統の書物に、山脇東洋の「蔵志」（宝暦九年、一七五九）、河口信任の「解屍編」（明和九年、一七七二）、本木良意の「和蘭全軀内外分合図」（同年）、杉田玄白の「解体約図」（安永二年正月、一七七三）、つづいて「解体新書」（安永三年八月、一七七四）がある。宇田川玄随の「西説内科撰要」が刊行されはじめたのは、春泰の没した年からである。

これを見てわかるように、当時は蘭学の医学の著作（主として訳著）は、まだ出はじめたばかりの時期で、春泰の蔵書にそれらが無いのは、当時の事情を反映しているのかもしれない。それにしても、そこに「解体新書」五巻のないのは、意外である。散逸ということも考えられる。

なお、嶺卓二氏のしらべによると、目録中の書物のうち、現存のものは、「傷寒論」、「金匱」、「方函」、「類聚方」、「巻懐食鏡」、「方彙」であるという。

一〇、春泰と玄真

安岡玄真が、春泰の没するすこしまえから、春泰の家に寄食していたこと、春泰の没後すぐに「継世統譜」をつくりあげたことは、春泰と玄真とのつながりをよくあらわしている。

玄真は、蘭学の發達に大きな役目をはたらいた人で、「蘭学事始」のなかでも、玄白の書いた個人の回想としては、もっともくわしい。それによると、玄真ははじめ宇田川玄随の漢学の弟子であったが、玄随が蘭学にひきいれるつもりで、大槻玄沢に紹介した。玄沢は、玄真を玄白に紹介した。玄真は多分前野良沢について熱心に蘭語を勉強し、しまいには玄白の家に寄食したいとたのんだが、玄白の方にもさしつかえがあって、しばらく嶺春泰にあずけたのである。

「蘭学事始」に

「そのころ家に支れることありて、暫く同社嶺春泰が許に託す。この頃春泰、病んで日々に篤し、終に物故せり。ゆゑ

にこの後、玄沢、甫周君（桂川）へ謀りて同所へ託して曰く（後略）

これは、まさしく、春泰の没した時（寛政五年十月）のことをのべているわけである。春泰の没するにあたって、奇食していた玄真が後事を托されたことも、没後「継世統譜」をまとめたことも、資料の示すところがたがいによく一致する。

杉田玄白をたよってきた玄真を、嶺春泰に托したという事実は、春泰が玄白に「頗る出精せし」（「蘭学事始」）人物として、おもく見られていたことを証していると考えていいであろう。そのころの蘭学社中の主な人物の年令を見ると、前野良沢をのぞいて、良沢より十歳下の杉田玄白について年長であったのが、玄白より十三歳下の春泰であった。そのころの春泰は、蘭学社中の主要な信頼すべき人物であったわけである。

一一、春泰の蘭語

「春泰の蘭語」を「春泰の医学と蘭学」と区別してとりあつかうのには、理由がある。

嶺家に現存する文書のなかに、蘭語を書いたものが数種あるが、そのうちで春泰に直接関係があると断定できるものは、わずかである。しかもその断定に達するまでには、いろいろの考証が必要である。一方蘭学の発達史という立場から見れば、この時代の蘭語文書は、それ自身研究資料として重要である。したがって、このようなひろい見方もとりながら、「春泰と蘭語」を考えるのが、いちばん適当なこととおもわれるのである。

以下に、関係資料を紹介する。

蘭語文書 その一

巻紙に毛筆で書いた断片である。

Aan den WelEdele groot Agtbare en Hoog Welgebooren Heer, Landsheer van Tanba

.....
.....

WelEdele grootagtb: en Hoog welgeb: Heer UwEdele Zeer

gehoorsame en onderdanige Dienaer

M. Suintaj

これは、てがみの冒頭と末尾のきわめて形式的な句の例を書いたものである。はじめの方に Landsheer van Tanba (丹波守)とあり、あとに M: Suintaj (M・シュンタイ)とあるのが注目される。この丹波守が誰かわからない。この紙片の左端下方の余白に Den... Signats in het 9 Jaar der Nengo Tennio (天明という年号の九年四月...)とあるのが、これの書かれた年号とおもわれる。ただし天明九年(一七八九)は、その年の一月二十五日に寛政と改元されているから、天明九年四月とあるのには疑問がのこる。いずれにしてもこの時代の「M・シュンタイ」といえば嶺春泰と断定してよいであろう。ただしこれが春泰の自筆かどうかは断定できない。M: Suintajは一応署名の体裁をなしている。

蘭語文書 2611

この蘭文には内容があつて、手紙の形式をなしている。

WelEdele Heer OP: M: Loth

Door UE. brief heb ik g'weeten dat UE daar in eichte kost van twee boeken meer dan 15-Cobang hebben, dog het ik ze gaarne will hebben, maar ze veel kan niet voorbetalen, met hoog achting

UwEdele Dienstwillige
Dienaer

M: Suintaj

大意は、Loth氏あての手紙で、Loth氏からの知らせで二冊の書物代が十五小判（二両の意味か）以上と知り、入手したのはやまやまでであるが、支払えないということのようである。あて名のLothという人物は不明である。

これも毛筆であるが、筆蹟は、さきの「蘭語文書その一」のものとはちがっている。M: Suintajの字体もちがう。しかしこれが手控のために誰かが書いたものかもしれないので、断定的なことはいえない。

このような、おそらく蘭書買入れの交渉の手紙が、当時オランダ人とのあいだに往復していたのであろう。研究に値するとおもわれる。

蘭語文書 その三

蘭書の写本。七枚を袋綴にしたもの。

第一ページ上半に、五行にわけて、

ERSTE DEEL/OVER/De algemeene Orzaken/DER/ZIEKTEN（「病因総論第一部」の意）

と書いてある。

ついで、本文の冒頭に

ERSTE HOOFDSTUK/Over de ziekten der Kinderen.（「第一章小児病について」の意）

とあるので、その内容がわかる。原典はまだしらべていない。

この写本ではなはだ注目すべきものは、蘭文の行間に書きこまれた訳語である。ことに最初の三ページには、ほとんど逐語的につけられており、あとになるほどまばらになる。訳語をたどると、返り点などがついて、まず蘭語に訳語を当て、それを漢文式に読む方式を示している。これは当時前野良沢以来おこなわれていた方式である。

ここでとくに注目したいのは、その訳語の漢字の書体のうち、「説」「為」「無」「義」などの特異な書体は、春泰自筆の「傷寒證治類聚」（後述）のなかに見出されるものと全く同じであることである。したがって、すくなくとも行間の文字

は、春泰の自筆と断定していい。

この推定が正しければ、この写本は春泰が訳読、または訳出ししようとした努力の一端を示す貴重な資料ということができよう。この時代に蘭語を写本できる人は、そう多くはなかったであろうし、蘭語の写本とその翻訳とを別人がおこなったとも考えられないから、この教葉の蘭書の写本の断片は、全体が春泰の自筆とするのが妥当であろう。この蘭字を、さきの M. Suntuaj の署名の書体とをくらべると、同筆とはにわかには断定できない相異がある。この蘭書写本の蘭字を自筆と見れば、さきの文書（一）の紙片の文字は自筆でないとしなければならぬ。

ここに疑問がのこるのは、春泰はこれらの訳語をなから見つけ出したかという点である。わが国最初の蘭和辞書「ハルマ和解」が完成したのは、寛政八年（一七九六）二月であるから、春泰の没後になる。春泰の時代の蘭学社中になにか蘭和辞書の役目をする手控のようなものが存在していたと考えられる。なぜなら、解体新書が完成（一七七四）してから、「ハルマ和解」ができるまでの二十年間も蘭和辞書の役目をするものがなかったとは考えられないからである。現に「継世統譜」中に二つの辞書があげられている。

それはそれとして、この写本に見出される訳語（訳字）の性質から見れば、この写本を読もうとした人の訳語の力は高いとはいえない。

もう一つ考えられないことのない可能性は、春泰が、訳語の記入のある写書をそのまま写本したのではないかということである。後世の蘭語学習書などにこの種のものを見うけるが、春泰の時代には、そのような可能性はすくないとおもわれる。

蘭語文書 その四

オランダ文字あるいは、その綴字の練習とおもわれる小さな紙片数葉である。そのひとつに、つたない文字で

tulu, kame, matu, take

udagawa, genduisama

と筆写してあって、それに朱筆で

toeloe, kame, matoe, take

oedagawa gendoei

と別に書いてある。一行目の udagawa genduisama (ウダガワ・ゲンズイ・サマ)、を朱で oedgawa gendoei (ウダガワ・ゲンズイ) と書き、ロをことごとく oe とあらためている。サマをとり去ったところを見ると、この朱筆の主は、宇田川玄随その人であろう。春泰の子松太郎の書いたものを、玄随が添削したものと断定できる。

蘭語文書 その五

さきと同様の目的のものとおもわれるもので、紙片につきの文字が毛筆で書かれてある。

KOOKOOTENNOO

Kimigatame faloenonihidete Wakamatoemoe Wagakolomdeni jukiwafelitoetoe

光孝天皇「君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣手に 雪は降りつつ」をローマ字で書いたものである。これにも、朱筆でところどころに文字の出来ばえを評価したとおもわれるしるしがあり、おわりに「合作」と書いてある。「合作」の意味はわからない。ローマ字の筆蹟はさきのものより、ずっと上手である。朱筆の主はやはり玄随か。

蘭語文書 その六

きわめて達筆でアルファベットを大きく書いたもの三葉。あきらかに習字の見本である。春泰の子松太郎のためのものであろうか。筆者は宇田川玄随か。うち二枚は奉書、一枚は厚手の西洋紙に書かれている。

ほかに美濃判大の和紙に大きく、

Sneeuw Maen Bloem

と書いたもの、

Daar werd in de Waereldsche Zaaken Gestadig (以下欠損)

と書いたものがある。

紙質もその古さもおなじようである。

前者は「雪・月・花」の意。後者の意味はとりがたい。頭文字のかざり方に多少のちがいはあるが、大体おなじ筆蹟としてよさそうである。筆者のせんさくは不可能であるが、よほどの達筆家である。

これとつながりがあるとおもわれる小さな洋紙片がある。ペン書きで左の文がある。

Gestadig は交起義不休息寒尽則暑来之意

bespeurt は運之義か類スルかにて可有存分未吟味は不仕候

ところが、gestadig は、さきの美濃紙に書いた蘭文のなかにある。この蘭文をもらった主は、この二語の文意がわからなくて、誰かに問い合わせたらしく、その回答がすなわちこの紙片となったとおもわれる。Bespeurtの方は、切れてしまった方の紙にあるらしく、その上半分とおもわれるものが、残っている。回答者もこの方は意味がわからなかったと見えて、「未吟味は不仕候」と書いているところを見ると、美濃紙の揮毫は、日本人でないのかも知れない。回答が洋紙にペン書きであるところを見ると、ひょっとすると、参府のため江戸本石町の長崎屋にとまっていたカピタン一行中の通詞の筆か。そうなると、美濃紙への筆者は蘭人か。江戸の長崎屋を訪れた蘭学者たちが、カピタン付の蘭医から、この種の揮毫をもらって帰る実例は、大槻玄沢の「西賓対晤」にもしばしば見えている。嶺春泰も、時には長崎屋訪問者のな

かまだったのかもしれない。

蘭語文書 その八

最後に、もっとも謎につつまれた資料をとりあげる。良質の西洋紙二枚をかさねて二つ折りとし、その背の上下の二カ所を糸で簡単にとじたもので、計四ページの小冊子形になっている。それに、ペン書きで蘭文が書いてある。書体はきわめてうつくしくとのっている。蘭文の内容とその巧拙と、用紙などから判断すれば、通詞の筆と考えられる。

ところで、その内容がきわめて特殊なので、その全文を紹介する。訳語(文意)はわたくしが、かりそめにつけたものである。

Ik heb uE : Eerstemaal gesien, gelieft u mij to kennen.

Hoe is uw naam

Mijn naam is Suntaij

Ik ben Doctor, en ik zeer liefde en hoog agt op uwer Hollandse geneeskunstig

Versoek ik uE : Zeer vriendelyk, met u permisie my geeven op dat ik dikmalen bij u mag verschijnen, dewijl ik een en ander te willen vragen en leern, gelieft daar door u onderrigting te bewijzen en Elucideren, Zullen my dit en alles te onhindige verpligten

In wat lands geboord zijn uE : / Hoe oud ben u geweest, toen uE : uijt vader land vertrokt / Heeft uE: me vrouw en jongen heeren/ook uE ouders nog gezondhijd.

Neemt uE niet qualyk, bij ons zo geseget, dat uE : natie zijn leeven in

はじめてお目にかかります。どうかお見知りおきください。

お名前は何？

わたくしの名はシュタイ(春泰)です。

わたくしは医師でありまして、お國のオランダの医学を尊敬しています。

なにこそ、今後たびたびお訪ねして、いろいろの病問を質問しますから、教示、解説していただくようお願いしねがいたい。

どこで生まれましたか/お國を出られたときいくつにおなりでしたか/夫人とお子さんがおありですか/御両親は御壯健ですか。

わが國では、お國の國民は短命だと申しています

kort / in het waarhijd of niet / omtrent wel hoe veel yaaren kunnen leeven zijn

De kind in zyn Baarmoeder, blijft hy zo ordentelijk als zijn hooft naar bovenwaarts en zijne voet is neerwaarts staan, of die hy onderste bouen staad en blijven.

Voor de koorts gebruikt men de China-China, is in een geneesboek gesegt als; die heeft de kragt van het zamentrekking, waarom die voor gezond hat beschadigen /; Edog in het Boek Bucan vermeld dewelk zoo meest voor alle ziekte gepresen heeft; / welk recept is te best en waarschenlijk? Als men iets gegeten naderhand af keer van de maag tegen die kost, of braaken, de maag kan die etbaar niet in verdragen en verduwen, dat genoemd in Chinese Kaccocits, by ons genoemdl Fakiyamaïj /; en nog als men 's morgens gegeten dan s uavonds braaken, dat genoemd in Chinese Vonje by ons Motoliyamaïj g' heeten /; Hoe genoemd op zijn Holl: die bijde zierde; van hoe ontsteldheid en wat quajikhijd van maag zullen onderhevig is.

Gebruikt men met alleen de lancet voor het aderlaten, daar wil wensch ik u eens te mogen sien

Hier heevens Bekomt uwEdele eenige kleinigheden in verwagting van een gunstig acceptatie, zo blijve met agting.

Ik gaa heen, morgen sal ik u weder komen sien, vaart wel mijn Heer.

Ik wensch u goeden morgen, dag, avonds,

Hoe vaart uE:

Zeer wel god dank, hoe vaard u.

が、ほんとうですかどうですか。およそ何まで生きますか。

子宮内の胎児は、普通のように頭を上を足を下に立っていますか、あるいは上下逆になっていますか。

コールツ(熱)にはキナを用いますが、ある治療書には収縮力を持っていて健康体を害するとあります。しかし Bucan という書には、すべての病に処方してよいように書いてあります。これにてよろしきや。食べたあと吐き、消化できぬ症状をシナでは隔益、日本では吐き病とよびます。朝食べたものを夕方吐くのを区置、日本ではもどり病とよびます。オランダでは両病をなんとよびますか? いかにして静め、苦痛をなくしますか?

刺絡にランセットを用いますか? あなたの刺絡を拝見したい。

御歓迎を謝する意味で、ここにつまらぬ品物を持ってまいりました。どうかお受けとりください。

これにて失礼いたします。また明日参上いたします。御気嫌よろしく。

おはようございます。今日は。今晚は。

いかがですか?

おかげで元気です。そしてあなたは。

ot uwen dienst

Gaat zitten / of, neemt u plaats.

dank zeer

(飲酒の時) op u gezondheid (二杯ノムトキニ)

op u me vrouw gezondheid

vaart wel

ot weder siens.

^t ot morgen.

(第7ページには別人の手で毛筆で)

ik heb u over drie jaar gesien had

bijsondere felicitieit dat u met gelukkigste aangekomen zijn

versoeke ik u zeer vriendelijk, bouen staande van mijn gebrekkige opgesteld

e verbeeteren, warmede zulk verpligten.

かしこまりました。

おすわり下さい。

ありがとうございます。

御健康のために(乾杯)

奥方の御健康のために。

さようなら。ごきげんよう。

さようなら、またおめにかかります。

明日まで(では明日)

三年以上お目にかかっています。

ようこそいらつしやいました。

わたくしの、つたない蘭語を御訂正ください(？)

内容は、春泰がオランダ人と対話するときの蘭語を逐一書きつづったものとおもわれる。最後には、別れのあいさつのことばが、何種類かならべてある。長崎屋での対話用の原稿なのかもしれない。

この小さな一綴とじの冊子は、まだ多くの未解決の疑問がのこされてはいるが、まことに貴重な資料である。熱にキナを与えることについての質問のなかに *Bucan* という書名が出てくるが、春泰の蔵書目録「継世統譜」にある蘭書「フカン」にちがいない。春泰はそれをかなり読みこんでいたと考えられる。

一二、春泰関係文書(蘭語文書を除く)

蘭語関係のものは便宜上「一一、春泰の蘭語」として別にまとめた。

春泰関係文書 その一

正月十日御講釈「論語微子篇」一枚（自筆）。末尾に「嶺春泰拝講」とある。春泰の若いころ、藩侯の殿中で講書したという記録があるから、これはその手控の一つであろう。きわめて謹直な文字で書かれている。

正月十日

御講釈

論語微子篇

長沮桀溺耦^レ而耕^ス孔子過^ク之^ヲ使^ニ子路^ヲ問^ニ津^ヲ焉長沮曰夫^ノ執^ル耒與者^ハ爲^ル誰^ニ子路曰爲^ニ孔丘^ニ曰是^レ魯^ノ孔丘^ト曰是^レ也曰是^レ津^ヲ矣問^ニ於桀溺^ニ桀溺曰子^ハ爲^レ誰^曰爲^ニ仲由^ニ曰是^レ魯^ノ孔丘^之徒^ト對^テ曰然^リ曰滔滔^{タル}者^ハ天下^皆是^也而誰^ト以^ニ易^シ之^且而^与ハ^ニ其^從ン^ニ辟^ル人^ノ之^士ニ^也豈^ニ若^ク從^フニ^辟ル^世之^士ニ^哉糶^ノ而不^輟マ^{子路}行^テ以^告ス^{夫子}憮然^ト曰鳥獸^ニハ^不レ^可与^ニ同^ス群^ヲ吾^非ソ^ニ斯^ノ人^之徒^ト与^ニニ^而誰^ト与^ニ天下^有レ^道丘^不ニ^与易^ヘ一^也

嶺春泰 拝講

春泰関係文書 その二

「傷寒証治類聚」 嶺觀春泰 纂輯

一葉（自筆）

「陰陽発病総論」の冒頭の十数行だけ。最後の数行は文字ははなはだしく乱雑である。すべて春泰の自筆である。

春泰ははじめ漢方を修めて一家をなしていたから、これはそのころの断片であろう。冒頭に「観按」ではじまる頭注がある。観は春泰の諱である。この頭注の一部に「余近読西洋医籍云云」とあるから、春泰が西洋医学を修めてから書き入れた注であろう。

傷寒証治類聚

嶺觀春泰 纂輯

陰陽発病総論

病有發熱惡寒者發於陽也無熱惡寒者發於陰也發於陽者七日愈發於陰者六日愈以陽數七陰數六也

〔頭注〕 觀按無熱蓋無發熱也比上文有發字為備蓋省文不然脫一字

又按限愈期以日數蓋古之道也余讀西洋醫籍亦皆說愈期日數其勢不得不然近來稱古方者□乃擯斥之可謂不學無術也

錢潢曰此一節提絜綱領統論陰陽當冠於六經之首自叔和無已諸家錯簡於太陽脉証之後致喻氏次未熱注無熱悖於立言之旨矣蓋仲景以外邪之感受本難知發則可辨因發知受有陰經陽經之不同故分發熱無熱之各異以定陽奇陰耦之愈期也陽七日陰六日者概言其理所当然而非必然者也七者陽之復少陽之數也六者陰之極老陰數也蓋陽數始於一而終於九陰數起於二而極於六此天地陰陽之至數也然一極之內分陰分陽而為兩儀兩儀各分太少而為至數也然極之內分陽而為兩儀兩(以下なし)

春泰關係文書 その三

松太郎命名書 「春泰自筆」

天明元年(一七八一)六月十六日、春泰に長男が生まれたので、お七夜に「松太郎」と命名した。これはその命名書である。天明元年(一七八一)六月二十二日付。松太郎ものち俊泰、春泰と号した。筆者春泰の訂正のあとがある。

前文によると、高崎藩では、男子を生むと、藩の世子が松一株をたまわるといふ。春泰の長男も松をもらったので、それにちなんで「松太郎」と名づけたといふ。

天明改元夏六月十六日吾始挙一男。藩之世子乃嘉賜以松樹一株。而令移植諸家庭以祝兒之栄盛也。乃拜世子之賜以為名曰松太郎。太郎則長子俗称也。

松太郎

祝辞

維夏之季 爾此降生 世子乃嘉 祈爾長成 賜以松樹 即取為名

鬱夫松樹 乃茂乃米 爾之岐嶷 是家之兄 共其米茂 為幹為楨

天明改元夏六月二十二日

嶺 春泰通卿書

春泰關係文書 その四

蘭方処方例 一葉春泰自筆

蘭方処方例二種（後散方をいれて三種）を巻紙一葉にしたためたもの。春泰が蘭方を修めてからのもの。ただし筆写したものかどうかは不明である。

第一方

コラルツバスト

木皮名和漢未産

四銭

ヘイルセル ハンスタール

鈔鉄屑

八銭

カネール

肉圭

二銭

ソイクル

砂糖

八銭

ベステ ウェキン

上好葡萄酒

百九拾二銭

右五味入小筒口硝子壺引取薬氣一昼夜以任用

毎服十六銭 日二或三

主治能益氣力強精神補虛損其効如神

第二方

ベステフルトゲラスブテポクホウト

拭上好品刮用

三拾六銭

ウェキン ステーン

葡萄酒樽底凝結者

一銭

右二味入密器内加水五百七拾六銭以置熱灰或熱砂上而引取薬氣一昼夜而後微火煎一朧又加好製焼酒三拾二銭再煮暫朧下

火密器納貯以任用每服二十四錢日四若用是方經一月而不取効者宜用後散其効更妙 主治清血液仍經件症諸部疼痛者

後散方

アラビセゴム 為極末

オクリカンキリ

ボクホウト脂

一錢

五分

三分三厘三毛

右三味合和研勻分為六貼日三茶湯送下

右用諸方而後以焰硝少許投冷水中拌勻浸洗陽物日四或五禁食諸辛熱及油膩膏粱犯之甚其為妨害

用右件諸方而不治者再作第二方用之

又宜八日或十日間一用緩下劑以下之加製煉水銀或メリクートリス ドルシス佳不宜他藥

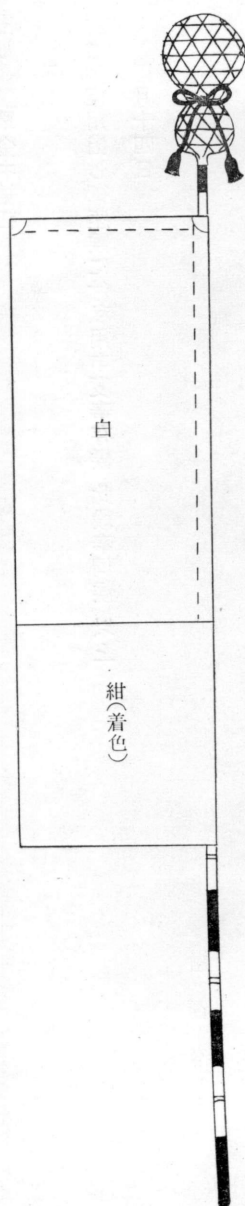
春泰關係文書 その五

「由緒書」 春泰自筆

天明四甲辰年閏正月三日（一七八四）提出。春泰三十九歳とある。父春安と春泰の由緒を書いたもの。

春泰關係文書 その六

春泰旗指物使用伺書控（着色）



出し籠瓢算金中結紅

右亡父相用出し御座候に付私用申度奉存候 此段奉伺候 以上

正月十四日

嶺 春 泰

年代は書いてない。春泰が家督を相続したのは、春安の没した翌年、宝曆八年（一七五八）二月十八日である。
春泰関係文書 その七

春泰あての書状（古鬲より）（句点は朱）

子光嶺君 梧下

古鬲敬具

昨辱見 顧、但先生無酒以酬厚意、是為可恨也、所承吳漢之言、退而思之、如有所得。故聊撰出數條以報之、請 子光察焉、管子曰、赦者、小利而大害也、久而不勝其禍、無赦者、小害而大利也、久而不勝其福、故赦者、犇馬之委轡也、無赦者、瘞疽之礦石也、華陽国志曰、諸葛亮時、有言公惜赦者、亮答曰、治世以大德、不以小惠、故醫術吳漢、不願為赦、先帝亦言、吾周旋陳元方鄭康成間、每見、啓告治亂之道悉矣、曾不語赦也、若劉景叔父子、歲々赦宥、何益於治、又荀悅曰、夫赦、權時之宜、非常典也、漢興、承兵革之後、大過之代、比屋可刑、故設三章之法、申以大赦之令、蕩滌穢流、與人更始、時勢然也、後代承業、習而不革、失時宜矣、又裴頠曰、臣聞、感神以政、応変以誠、故桑穀之異、以勉已而消、漢末屢赦、猶凌不反、由此言之、上協宿度、下寧万国、唯在賢能憤厥庶政、殆非孤赦所能増損也、嘗讀蜀志、延熙九年、秋大赦、孟光責大將軍費禕曰、夫赦者、偏枯之物、非明世所宜、有衰弊窮極必不得已、然後可權而行之、今上仁賢、百僚称職、有何旦夕之危以惠奸宄、禕顧謝而已、由此觀之、非独一孔明能知吳漢之意、荀悅・孟光・裴頠等所論、皆如此、後漢時、河内張成者、善說風角推占、当赦、遂教子殺人、李膺捕之、既而逢赦獲免、膺愈憤、竟案殺

之、赦宥之蔽、有如此者、書曰、眚災肆赦、又曰、宥過無大、先王之制、唯有宥過一條、猶不宥其大者、况陷刑者、周礼有三赦三宥之法、可以考而已、

古鬲拜具

子光嶺君 足下

春泰關係文書 その八

春泰にあてた大槻玄沢の書状（断片）

春泰と大槻玄沢との交渉のあった事実を物語る資料である。

嶺春泰様

大槻玄沢 拜

拝復

捧読。如來教。爾后御契關奉謝候。愈御多福之旨奉大悦候。然者テーリングウースト薬方御試被成度病者御座候ニ付、可申上旨承知仕候。テレビンテキンノ油にて（以下欠）

一三、春泰の性格

春泰の性格は、おだやかで、まじめで、勉強ずきで、したがって、物識りであったようである。宇田川玄隨が「君温厚篤恭好學博洽」（碑文）と書き、安岡玄真が「性素温厚忠実好話人」（継世統譜）と書き、杉田玄白が「頗る出精せし」（蘭学事始）と回想している。

春泰の医師がどのようなようであったかは、それを推測する記載がない。ただ由緒書によって、年とともに春泰の地位が高くなったことを知るだけである。安岡玄真が「嶺觀先生奕世仕侯英名四聞」（継世統譜）と書いているのも、春泰の名声を察するにたりよう。

なお片倉鶴陵（一七五一—一八二二）が「青囊瑣探」のなかで、春泰の一面をよくえがいている。富士川游が輯録した杏林叢談のなかで原文の漢文を、かなまじりの文にかえたものを掲げているので、それを引用する（中外医事新報、第一一三八号、昭和三年八月）。

「安永戊戌の冬、余（片倉鶴陵）居を本石坊に卜す、隣家に嶺春泰なるものあり、其母瘡積を患へて数日差へず、嶺来りて治を余に譲る、廻ち千金の半夏湯及び紅勝丸を疏して之を与ふ、之を服して三日にして全く瘳ゆ、嶺大いに之を奇とし、篤く余を信じて常に推轂す、遂に交情日に深し、凡そ奇書珍籍秘方妙薬を得れば即ち相与に秘借せず、読み且つ録して以て快と称す、頃ろ赤水玄珠を覽るに、松巒翁生子に謂て曰く、医家凡そ一方を得れば輒ち自から秘して以て高しとす、君独り玄珠を公にせんと欲す、是れ蒼生を寿するに意あるものなり、云々、今余と嶺とに於ける、実に此に取る事あるなり、余東都にあること幾んど四十年、未だ一人の嶺の如き、莫逆の者あらず、嶺博学にして方伎に精し、晩に阿蘭の学を好み、まさに医方を翻訳して同儕に広めんとし、業未だ竣らずして歿す、実に惜むべきかな、産科発蒙、牒分児凶解、悉く嶺に托して代て翻訳せしむ、嶺の功少しとなさざるなり。」（片倉鶴陵、青囊瑣探、原文漢文）

これで、春泰が江戸で安永戊戌七年（一七七八）のころ本石町にすんでいて、片倉鶴陵と隣相志であったこと、春泰がたいそう勉強家で、鶴陵とはほんとうの親友となつて、学問のことはたがいになんでも知らせあつて、すこしもかくさなかつたこと、そして春泰が博学であつたことがわかる。また春泰の母が病気で数日なならないので、鶴陵に相談したところ、処方にあたえられ、それをのんで三日で全治したので、それ以来春泰は鶴陵を大いに尊敬したことが語られている。このことは、さきにのべたように、春泰の医学がまだ漢方に重くて、蘭方に十分習熟していなかったことを物語っている。このころ春泰は三十三歳、鶴陵二十八歳である。このように、鶴陵は春泰より五歳若いばかりでなく、鶴陵が二十八歳という若さであるのを、このように尊敬し親しくまじわつたことは、春泰の心情をよくあらわしているといえよう。

益友の影響は、春泰から鶴陵に対してもいぢりしかつた。それは鶴陵が最後に書いているように、鶴陵の著わした「産科発蒙」「牒分的児凶解」（Deventer 著産科書）などは、すべて春泰にまかせて翻訳してもらつたことであるか

ら、鶴陵の日本の産科学への寄与のなかに、なにほどこかの蘭学の影響があるのは、とりもなわず春泰の寄与といえよう。「産科發蒙」六巻は、寛政七年（一七九五）の自序があり、刊行は同十一年（一七九九）であるから、春泰の没後のことである。したがって、春泰の蘭学が進んで、鶴陵の役にたったのは、この点から見ても春泰の晩年のころであろうと考えられる。

一四、春泰の交友

寛政五年（一七九三）十月六日春泰が江戸で病死したときの葬式に関係ある文書が三通ある。「葬事雜載 寛政五癸丑十月六日」、「以德様御葬式入用一件 嶺松太郎 寛政五癸丑稔十月」、「野帳 寛政五癸丑十月七日」がそれである。これで野辺の送りが翌十月七日であったことが知られる。

「葬事雜載」は、弔問、香物の控帳である。その弔問者の名から、春泰の交友の一端を知ることができる。

そのなかに大槻玄沢、宇田川玄随（使が弔問）、桂川甫周（弟子大戸有器が弔問）、竹田快庵、稲村三伯、井田雄碩、高嶋松（昌）軒（同藩の医師）、大村周斎（妻の兄）、同姓の親類としては、嶺伴助、嶺庄太郎の名がある。また別の控に玄真の名があり、「継世統譜」に江馬春齡の名がある。玄沢、玄随、甫周、三伯、玄真はいずれも「蘭学事始」に登場する重要人物である。

前野良沢（一七三三—一八〇三）と杉田玄白（一七三三—一八一七）の二人と春泰との交渉がふかかったことは、良沢には蘭語を学び（碑文）、玄白には蘭学社中のひとりとして信望がたかかったことの記録（蘭学事始）でわかっている。春泰の死んだとき、良沢は七十一歳、玄白は六十一歳であった。

大槻玄沢（一七五七—一八二七）は、春泰より十一歳の年少であるが、蘭学の正統をついだ人で、その緻密な頭脳で、オランダ語を通じて吸収した西洋文化の適確さは、とりわけ光彩をはなっている。蘭語修得に関するかぎり、一度は玄沢に

つかなかったものはない、といつていくらいである。宇田川玄随も、杉田玄白にすすめられて漢学から転じて蘭学にすんだとき、やはり玄沢に学んでいる。春泰の死んだとき、玄沢は三十三歳であった。

宇田川玄随(槐園) (一七五五—一七九七)については、さきにたびたび述べたとおりで、江戸での春泰との交際はなかなか密なものがあつたともおもわれ、春泰の碑文も、友人として撰しているほどである。春泰の死んだとき、三十九歳であつた。

安岡玄真(一七六九—一八三四)は、のちの宇田川榛齋である。玄白、玄沢の時代をついで、蘭学の発展にもっとも功献の大きかつた人である。その人が、春泰の死んだころ、春泰の家に寄食していたということは、まことに興味がある。その年玄真は二十五歳であつた。

稲村三伯(一七五九—一八一二)は、蘭学事始に登場する重要人物の一人で、「ハルマ和解」を完成した。のち海上随鷗と改めた。玄真をよくかばつた人である。春泰の死んだとき、三十五歳である。

桂川甫周(一七五一—一八〇九)は、蘭学創始のころ、二十歳そこそこで、十九歳のときすでに奥医師にあげられ、天明三年(一七八三)には法眼に叙せられている特別の家柄の蘭学者である。蘭事事始によくえがかれている。春泰の没したとき、四十三歳である。

片倉鶴陵(一七五一—一八二二)は、桂川甫周と同年である。鶴陵のことは、さきにも述べたが、賀川流産科の名家で、はじめ多紀氏に漢方を学び、のち賀川氏に産科を学んで、江戸で開業した。たまたま嶺春泰の隣家にすむようになって、たがいに益友となり、春泰は鶴陵のためにオランダ語の産科書を訳して、著作をたすけた。鶴陵の治術に蘭方を加味するところが多いといわれているのは、春泰の寄与によるという。春泰が没したとき、五歳年下の鶴陵は四十三歳であつた。

高島松軒について、すこししておく必要がある。嶺家の文書のなかに高島松軒または昌軒の名を見出す。文献によると、高島氏は代々医をもって高崎侯に仕えた家で、九代目の昌軒は、華岡青洲に学んで外科をおさめ、また天保年間に高崎で解剖をおこない、解剖図をのこした。この昌軒は安政三年(一八五六)に五十四歳で死んでおり、春泰の没した寛

政五年（一七九三）には、まだ生れていない。したがって、この昌軒は春泰の世代とはつながりがない。この昌軒の父は意伯と号し、内科医であった。意伯が春泰にあてた手紙、春泰が意伯にあてた手紙の写しがのこっている。意伯が没したのは文政十三年（一八三〇）であるから、春泰が没してから（一七九三）、約三十七年後であるが、なお春泰の同時代者である可能性はある。そして「葬事雜載」には高島松軒の名があって、意伯の名がない。あるいは意伯が松軒といったのかも知れない。

一五、春泰の家計

春泰関係文書をしらべていて、意外な事実を見出した。それは春泰の家計が、はなはだ苦しかったことである。

春泰の葬式の会計帳「以德様御葬式入用一件」の十月六日の冒頭に、

一金二分二朱 有金

同日

一 同一両二分 拝借

一 同一両 当暮迄拝借

とある。すなわち有金がわずか二分二朱で、殿様から葬式の費用は計二両二分借りているのである。ついで、宇田川玄隨の「金一分」を筆頭として、十数名の香奠を書きこんだあとで、最後に

一 同一両 有済引合 玄真急借

という一行がある。安岡玄真からも急に二両借りたのである。

この控帳によれば、十月六日から十三日までの入金は「金七両二朱 錢八百文」であり、十月六日から十三日までの葬式ほかの諸入用は「金×四兩三分二朱 錢二百九十文」、そして「翌十四日調の差引有金」は「一金二兩一分余」である。

単純な収支決算をすれば、借金が殿様からの二兩二分と玄真からの二兩で、計四兩二分であって、残金は二兩余であるから、これでは借金はずぐには返せない。

家計の不如意は、松太郎が十三歳で家督をつぎ、成人したのちまでよくならず、のち俊泰さらに春泰と号して、高崎侯の御医師を勤める身となっても、ながくつづいた。

たとえば、自分の結婚の費用に、君侯から三兩を借り入れる願いを出したり、天保三年（一八三六）自分が死ぬ六月の朔日に、春以来の病気のため物入りが多いという理由で一兩八分の「拝借」を申し出て、一兩を借りている。また没した六月十三日の日付で、遺族がさらに三兩の「拝借」をお願い出て、二兩二分を借りている。

この状態は、さらにそのつぎの世代にもつづくのである。

一六、春泰の子孫

春泰の葬式の費用のことから、そのあとの家計の苦労のことに触れたが、その表向きの生活のことを書いておかなければならない。

さきよのべたように、寛政五年（一七九三）十月六日春泰は、一子松太郎がまだおさないのを気にかけて没した。松太郎は天明元年（一七八一）六月十六日に江戸で生まれており、このとき十三歳であった。

松太郎は幼名で、諱は保光、のち俊泰と号し、さらにのち春泰とあらためた。由緒書によれば、父春泰のなくなった年の十一月家督をついで十五人扶持をいただき、御医師に仰付けられた。ただし十三歳ではどうしようもなく、高崎勝手に仰付けられたが、江戸での医学修行を願ひ出てゆるされた。その後ずっと高崎侯に仕えたのが、文政四年辛巳（一八二二）十二月には、「近來医業出精」により君侯からはげまされている。この年すでに四十一歳である。そして翌文政五年（一八二二）九月二十四日には「奥御居間後診脉」を命ぜられている。その後も藩侯の医師としての地位がだんだん高くなっ

ていった。そして天保七年（一八三六）六月十三日五十七歳で病死した。

しかもそのころ経済的にはなほだ必迫していたことは、まえにのべたとおりである。

二代目春泰には三男三女があった。長男が藪（つとむ）（一八一四—一八五二）で、幼名柔五郎。のち春安、さらにのち新弥とあらためた。父二代目春泰が没したとき、すでに二十三歳であったから、この場合の跡目相続は比較的無理がすくなかった。

しかし新弥の死んだあとをついだのは、わずか三歳の俊太郎（一八四九生）で、ふたたび世代の交代がみだれた。諱は春義、幼名が松太郎から俊太郎となり、のち卓也とあらためた。

卓也のあとは甲也（一八七四—一九五〇）がつぎ、それから現在の当主卓二（一九一四生）につながる。甲也は明治になってから生れた人で、若いころ高崎をはなれて、東京で国民英語学校に学び、一時静岡師範学校で教えたが、明治の末から太平洋戦争近くまで、牛込の私立成城中学校で英語を教えていた。

卓二の姉ゆき（一九〇四生）は、九州大学教授向坂逸郎（現名誉教授）に嫁した。卓二夫妻には子がなない。

このように、嶺家は春安以来、しばしば当主が若くて没し、後嗣がおさなかつたため、そのことが家計的にも大きな打撃となった。しかし、このようなことは、どの家族にもおこつたことであつて、かならずしも例外とはいえない。嶺家は、よく今日まで世代がつづいて、今日の安定に達した。めでたいことである。

一七、むすび

嶺春泰は、杉田玄白たちの蘭学創始の時期にあい、温厚で誠実な人がらと、蘭学を学ぶ努力とによって、当時の「蘭学社中」に重きをなし、交友にもめぐまれたが、蘭書翻訳の仕事は、すべて未完成におわり、今日に伝わる著作がない。玄白等に加わつて、ターヘル・アナトミアの翻訳に力をあわせたといわれているが、その可能性はうすい。

春泰は若くして漢学にくわしく、漢方医学で一家をなし、高崎侯に仕えて御医師となつたが、のち蘭方医学に転じて、

よく世の進歩におくれなかった。

嶺家は春泰をふくめて、二代にわたり、またのちに、幼い後継者がつづいたという不遇もあって、家業も十分に伝わらず、家計もきわめて苦しくなった。そしていつとはなく、嶺春泰の名は、「蘭学事始」のなかにだけとどまって、歴史のなかに消え去ったかのようにおもわれた。

ところが、当主嶺卓二氏が保存せられていた関係文書のなかから、ようやく嶺春泰のすがたの一部をあらわすことができることとなった。

一方わたくしは、嶺春泰伝をまとめるにあたって、その事蹟のほかに、蘭学創始の時代のさまざまな実態にある程度接することができたことにも、すくなからぬ意義をみとめたい。そのような資料を、これまで約二百年にわたって、保存しつづけられた嶺家の方々に深い敬意を表したい。最初にことわったように、わたくしには折角の春泰関係文書を十分に活用するだけの基礎知識がない。今後適当な研究者が出るまで、これらの文書が嶺家に大切に保存されることを望んで筆をおく。

この調査の一部は、昭和四十年六月十八日東京の法政大学でおこなわれた蘭学資料研究会大会において「嶺春泰伝補遺」と題して、簡単に報告した。

嶺春泰年譜

延享三年丙寅（一七四六）（春泰一歳）○この年春泰高崎で生（月日不詳）。諱は観、幼名桑五郎。字は子光。春泰はその号。

（これよりさき、この年父春安（四十三歳）は高崎侯に召されて侍医となり、真壁から高崎に移り住む。）

宝暦七年丁丑（一七五七）（春泰十二歳）○十二月八日 父春安病死（五十四歳）。（九月二十八日大槻玄沢生。）

宝暦八年戊寅（一七五八）（春泰十三歳）○二月十八日 家督相続。十人扶持。

宝暦九年己卯（一七五九）（春泰十四歳）（この年山脇東洋「蔵志」をあらわす。）

宝曆十二年壬午（一七六二）（春泰十七歳）○六月 江戸勝手被仰付 ○この年泰竜院、靈台院御読書所相手被仰付。また御殿中月次御講釈被仰付。（この年杉田玄白三十歳。八月十三日 山脇東洋死（五十八歳）。）

宝曆十三年癸未（一七六三）（春泰十八歳）○この春 林大学頭の門人となる。（この年平賀源内の「物類品鑑」なる。）

明和六年己丑（一七六九）（春泰二十四歳）（十月十二日 青木昆陽死（七十二歳）。この年安岡玄真生（のちの字田川榛齋）。）
明和八年辛卯（一七七二）（春泰二十六歳）○薬種料銀三枚被下置。（三月四日 杉田玄白（三十九歳）前野良沢（四十九歳）、

中川淳庵（三十三歳）等江戸千住骨ヶ原で腑分に立会い、翌三月五日ターヘル・アナトミア翻訳に着手。）

明和九年壬辰（一七七二）（春泰二十七歳）（十一月十六日安永と改元）○春泰が蘭学に関心を持ち、蘭学社中に加わったのは

このころからとされているが、おそらく、もうすこし後年であろう。（この年河口信任（三十七歳）の「解屍編」刊、

本木良意（一六二八—一六九七）の「和蘭全軀内外分合図」刊。）

安永二年癸巳（一七七三）（春泰二十八歳）（五月 杉田玄白（四十一歳）「解体約図」刊。この年前野良沢（五十一歳）長崎再遊。）

安永三年甲午（一七七四）（春泰二十九歳）○十二月 薬種料銀七枚加増。（八月 杉田玄白（四十二歳）等「解体新書」五巻刊。）

安永五年丙申（一七七六）（春泰三十一歳）○この年藩侯の日光社参御供。（この年蘭館長の江戸参府にツーンベリ（三十七歳）が随行。桂川甫周（二十六歳）が面接質問。七月四日 アメリカ独立宣言。）

安永六年丁酉（一七七七）（春泰三十二歳）○六月十五日 御ヒ役となり、御薬差上。十一月 外宅被仰付。（九月十四日 賀川玄悦死（七十八歳）。）

安永七年戊戌（一七七八）（春泰三十三歳）○十一月 藩侯の日光社参御供。○この年片倉鶴陵（二十八歳）が隣家に移転して来た。のち親友となる。（三月 大槻玄沢（二十二歳）が江戸に出て杉田玄白（四十六歳）の門人となる。）

天明元年辛丑（一七八一）（春泰三十六歳）（四月二日改元）○六月十六日 長男松太郎生。

天明二年壬寅（一七八二）（春泰三十七歳）○十二月二十八日 二十人扶持。葉種料銀十枚。（この年建部清庵の子由甫が杉田玄白（五十歳）の養子となり、杉田伯元という。この年建部清庵死（七十一歳）。）

天明三年癸卯（一七八三）（春泰三十八歳）（九月 大槻玄沢（二十七歳）の「蘭学階梯」の稿なる。天明八年刊。）

天明五年乙巳（一七八五）（春泰四十歳）（八月 前野良沢（六十三歳）の「和蘭訳筈」なる。この年大槻玄沢（二十九歳）長崎へ再遊。）

天明六年丙午（一七八六）（春泰四十一歳）（この年大槻玄沢（三十歳）蘭学塾「芝蘭堂」を開く。中川淳庵死（四十八歳）。）

天明八年戊申（一七八八）（春泰四十三歳）（この年大槻玄沢（三十二歳）「蘭学階梯」刊。）

寛政元年己酉（一七八九）（春泰四十四歳）（二月二十五日改元）（この年杉田玄白五十七歳、この年フランスン革命おこる）

寛政二年庚戌（一七九〇）（春泰四十五歳）○十二月 葉種料銀五枚加増。

寛政四年壬子（一七九二）（春泰四十七歳）（この年宇田川玄随（三十八歳）の「西説内科撰要」稿なる。翌年より刊行。）

寛政五年癸丑（一七九三）（春泰四十八歳）○このころ安岡玄真（のちの宇田川榛齋）が春泰宅に寄食していた。○十月六日

春泰病死。諡は「以德本性居士」。○翌十月七日江戸本郷三念寺に葬る。○同月 嗣子松太郎（十三歳）家督相続、十人扶持、御医師被仰付。幼年につき高崎勝手被仰付。ただし療治修行のため江戸滞在。（この年 前野良沢七十一歳、杉田玄白六十一歳、大槻玄沢三十七歳、宇田川玄随三十九歳、桂川甫周四十三歳、稻村三伯三十六歳、片倉鶴陵四十三歳、安岡玄真（のちの宇田川榛齋）二十五歳。）

Summary

Little has been known about *Shuntai Mine* (1746—93) who was considered as an important figure in early stage of Rangaku (Dutch studies) in Japan. The present author presents a detailed account of his life, making use of hitherto unpublished documents placed at his disposal by the courtesy of the *Mine* family

さきに本多夏彦氏は嶺甲也氏と親交があり、「嶺春泰先生之碑」の拓本を借り、これを多少敷衍して「蘭学者嶺春泰小伝」〔今昔〕第四卷・第一〇号、昭和八年十月）を書かれた、その最後に「嶺家は明治初年に、高崎柳川町で類焼したので、春泰先生関係文献を悉く亡くされたといふ」とあるのは、注目の要がある。わたくしが拝借した文書のほかに、まだ関係文献があったと解すべきであろうか。

本多氏は別に、その著「近世高崎叢談」（昭和十年七月）のなかで、項をもうけて「嶺春泰と清水謙山」を書いていらるが、春泰関係の文献にあたらしいものはない。

本文の校正がほとんどおわろうとしたころ、わたくしは早稲田大学図書館所蔵の宇田川玄隨編「蘭畝假載」の最初に、つぎの文字のあるのを知った。

東都槐園先生纂輯

美作	源	輝雄
長門	豊田	宗味校
高崎	嶺	春泰

これは二巻あって、第三巻は玄隨の自筆、第六巻は写本と鑑定されている。後者には、「高崎」のかわりに「常陽」とある。内容は、さまざま事項を、さまざまな人がオランダ語から訳したものをよせあつめたものである。春泰は翻訳にはあづかっていないから、春泰の業績とはいえないが、校閲者として春泰の名があることは、春泰の蘭学社会での地位を示す資料といえよう。

（緒方）

典藥諸家の概説

その一家福井家について

羽 倉 敬 尚

From a General Description on Some Families of Medical Profession for the Imperial Court

—On One of Them, "Family Fukui"—

Keisho Hakura

近世徳川時代各藩等の間ではよく藩士の家の株、家格を換金して譲り売買したようである、即ち藩祿で家が続けられぬ時には当主が隠居するとか実子があつてもこれを廃嫡し農商と云つた階級の謂はば名誉慾ある者の子弟を養子しその代償として相当の財産即ち土地その他の財物をその養子の持参財として収めて家を継がしめたのである、各藩臣でも上級階層の家では血統家名を重んじかかる事はアマリ耳にしないが中以下の家にはこの家の株の売買が相当あつたのである、旧幕時代太平統一世情安定し謂はゆる土農工商の世襲的生活に倦み飽いておつて広い社会生活体系から云はば一種の地均しコウ云う事でもやらねば高楊子式の武士階層も自滅を免れず又武士以外で好学の子弟の如き学

と云う風で武士となれば藩学等に入るの特権もあり即ち財物を以て公吏となり勉学すれば結局立身の途が講ぜられたのである。

志すは家業を捨てた一種の道楽財産のムダ遣い視せらる

各藩に於てはかかる変則的立身の途があるが京都の朝臣家即ち公家クゲはサスガ天朝に仕うる名門、血統家格を重んじかかる財物導入による家名存続法は絶対でない、強いて言はゞ諸侯大名と縁組する位が関の山で、徳川時代、最高の公家は上に五撰家あり、次に大臣家、羽林家、旧家、半家、新家等截然たる家格の階層あり各々先途の官位の定めあり、これを家格の「経」とすれば「緯」には藤原第一各統の源氏平氏清原、菅原卜部大中臣等の他姓あり謂はばガンジガラメの束縛下にあつて貧の中に家格を株守して天朝に奉仕して明治に至つておる。

上層の公家かくの如きであるから地下の諸家に於ても概ねこれに倣つてをるが、中には政権ない廷臣で吉凶時等以外は閑職にある者は、薄給でもあり、幕府差遣の禁中院中等の口向役人（朝廷の日常御生計の当務職）として、幕府附武家の下で公然の役職名なく兼務バイト式実務にたづさはつた者又は、殆んど無禄の社家（約二百家以上の上賀茂社氏人職の如き）が、その本籍を離れ多少余裕ある宮家や公家の家士、侍職等を兼務（これには例へば何家侍と職名がつく）した位である。その中に於て典薬諸家は、丹波姓の公家錦小路の典薬頭世襲、蔵人家（公家と地下との間の家）小森氏（丹波姓）の同助世襲に旧家高階、藤木（本籍は上述上賀茂社家氏人）の事務職員があつて、その下即ち専門医官は立前としては、世襲家でなく臨機、医師の実力名望ある医士が遠国人でも招致されて、召抱へられ任命されておる、これは概旨上述の如き典儀骨法厳正な朝廷の因襲的朝臣制度下に於て、実に俊英拔擢選任召抱への進歩法制であり、如何に山城盆地冬底冷え夏むし暑い京の不健康地に定住せらるる聖上の保健を重視したかが伺はれる、例へば徳川初期の名医の曲直瀬、山脇の如き何れも、古い世襲家でなく、皆その医名に依つて、召抱えられた新参家であ

つた、だから児孫人材あつて、家声をおとさずその家を継ぐのでなければ自然補任せられずその家は典医家として、中若しくは断絶となり代るに新参名医が召されておる。そしてかかる名医は医師、医博士、医生、針博士典薬大少九等の官に補せられる、この官職名は古く令制、宮内省中の典薬寮の職名が、その儘襲用されたのである。これらの給禄は臨時の外恐らく（常勤でなく交代制も考へられる）謂はゞ不定給であり従つて、自家に医院を開いて一般人の受診療治に任じたのである。私の知る謂はゆる典薬諸家、北尾、伊良子、山本、山口、杉山、三角、賀川、太田、山科、久野、百百（ドド）馬島、奥、古野（コノ）及び下述の福井家ら皆近世徳川期に新規召抱への家に属する、ムロン時代新古の別あり、又召抱え以後代々伝へて、明治維新に至つたのもあれば又中途辞して街巷の医となつたのもあり又何かの事由で京を離れて遠国に移つたのもある筈である。

これらの中、漢方を以て明治維新東京遷都にも従つて移り住み、明治二年九月、新制の大、中、小典医に引続き仕へた遺老としての大典医高階経徳（九段番町住で、息虎次郎は李王家侍医となつた） 中典医福井貞憲（次述の如く少

年時私が受診) 山科元行の三名は私面識あり、これらは後にこの典医の官名廢せられ、私の知った頃(明治三十一—四十三年の間)山科は四十三年没)には侍医又は御用掛として永く仕へ高階は侍医局勅任御用掛、福井は一旦挂冠京に帰ったが、明治二十年大正天皇の皇太子時代奉仕御用掛として召され、数年在京で帰西し山科は両陛下下のマッサアジを奉仕して、老に至った。その中、福井貞憲には、私少年時代京の北野の西小松原の別邸(現在孫貞明氏住居の家)に開業名医の称あり(専門は小児科だったか)母に伴はれて受診した淡い記憶があり、広い座敷の診察室に大きな火鉢が暖房代りに置いてあり、品の良い老国手の前に母子二人がすわると、元づ第一に母に向って、「お通じは」はとたづねられたとの事であった。

(2)

この福井氏は次載の如く、楓亭名は晋別号大車が壮年、菅隆伯の門に学び概ね安永天明時代町医として、京市にて令名あり、傍ら和漢の学に詣り、好んで典籍書画器物を蒐集し屋を崇蘭館と命しその藏儲は遠近に聞え寛政二年十六六歳、江戸幕府に召されて、医官となり居ること二年で江戸に終つてをる。その子が有名なる榕亭名は需でこれが初

めて禁中典藥寮に召され医博士に上り天保十五、九十二の天寿で終った。丹波守に任ぜられ何分長寿人その享世の間には父祖の性を承けて、文雅を愛好し藏儲多く広い交友人があり、その名諸書に散見する。

昭和二十九年五月、関西住の頃、本会関西支部例会の行事として、家族同伴洛西桂離宮拝観(参加者多く二回に分け)の際、同離宮近くに住む京都医界の元老で、私には旧縁家の間柄且つ福井家遠戚の革島廉三郎老博士の物ふりた広い座敷を拝観前の集合昼食の休憩所に拝借した際同家に伝はる福井三代楓亭榕亭棟(テイ)園の肖像(榕亭の写真次掲今まで未発表)や筆蹟類を展観したが、その後革島翁の徳憑もあり、その紹介に依り京都北区小松原北町の私には思出深い福井家に貞憲の孫貞明氏を訪うて、快く招ぜられ閑談時余旧事を語った。(榕亭像の贊の訳は末尾の通)

その際私は、同家先代歴世の藏儲の富を推称して、いつかこれらを学界に紹介せられたいものと願ひ出で、そのために書庫等からの取出し運搬等には、御迷惑をかけない様当方から、学生等を同伴手伝はしてもよいと迄突込んで、懇請したが、古い本ばかりで、参考の価値のあるものもなからうと半ば謙讓の面持ちで、それ以上強うることもなら

勤儉治家不在奥
 非是世間始寃人
 榕亭源需題



ず退出したが、その際、伝聞の瑣談として榕亭^{テイ園}の時
 代即ち盛業且つ蒐集盛の頃には、恐らく中国からの舶来書
 であらうが菰（コモ）包みが書庫に入りきららず永く座敷の
 椽の下に入れられてあったとか、榕亭に「適備録」の著あ
 り（適は行くの意）これは榕亭の女栄が京都堀川古義堂家
 伊藤家五代弘济号東峰の室であり、この頃、この伊藤本塾
 古義堂初代仁斉の嫡子二代東涯の嗣（三男）の三代東所そ
 の子四代東里の後（東峰は東里弟）で尚ほ幼、依て東涯弟
 で、分家した梅宇、備後福山藩儒に仕へて後を継いだ孫竹
 坡名弘亭が東所遺言で上京して本家の学業を補助した事が

あり（天理図書館編の古義堂文庫目録解説にて史実を補う）特
 に本支両家深交の間柄の際、備後福山に誰れか患者の診療
 等で、榕亭が出向いた時の紀行であらうかと思つた、現物
 にはお目にかからなかった、尚ほ森鷗外の「伊沢蘭軒伝」
 （伊沢は福山藩医）中にもタシカ福井家について、記述があ
 ったことを記憶する。

また榕亭の男^{テイ園}の室の芝築地家（シバツジ）は金融
 寺門の称ある、裕福な御室仁和寺門跡の譜代坊官の名門
 で、厳順又富藏の名高い、この寺内には名陶工仁清の窯跡
 あり、厳順は茗道の清興にも参じたが今は惜しくも散佚し

た由、その時、貞明氏が見せられた家系の写しを要項抄写したのが次に掲ぐるもの、氏は系図は家憲で、他人に見せたことないがとのことムロン未公表のものである。これについては去る昭和三十七年六月、当会総会に一部を説明口演したことがある。

この系図を見ると福井は足利初代、將軍高氏の末子、鎌倉初代管領足利左兵衛督基氏の血統であり、歴然武門の後である。従来私手がけた医家の系譜に於ては淡輪(タンナワ)が源義経の臣、佐藤忠信の裔、小石家及びこれは医家ではないが、大阪学校懷徳書院歴代師儒中井家この二家は共に橘姓で楠氏の裔と伝へ、丹後新宮が源姓十郎藏人行家の後、典葉杉山が木曾義仲の裔で越前住から入京など、何だか医家には武門のアトが多い様に感ぜられる。或いはこれは、井蛙の我田説で万葉学の傑僧大徳契沖の下川は、加藤清正の臣の後、同じ大阪の万葉学の先容下河辺長流は、大和小泉の片桐の臣の小崎の後、総じて、学問の家は武門の出自が多いので、医家もその範疇に属するのかもわからぬ、附、典葉杉山二代の伝、

これも天保度に召された新家でこの家の遠祖は木曾義仲の男、清水冠者義高と伝へ越前に移住し、朝倉氏に仕へ

天正元年頼宗と云うが主將義景に従つて戦死した。篤信の伝は京都上京出水六軒町西へ入。光清寺の墓碑にあり公卿姉小路公遂、公前父子の作、京都名家墳墓録に載つておる、その漢文を要約し、それに男信達(墓なし)を補つたのである。

杉山篤信字は子良号予齋越前福井の医青山常喬第五子にて、母は片山氏、同国三国の医杉山履信の養子となり上京して、名儒皆川淇園の門に入り禁中典葉寮小本法眼常以に医道を受け、天保七年十二月、同寮医師に拔擢せられ従六位上日向守に任叙せられ同九年七月御医に挙げられ弘化四年十月十二日終る五十四歳思誠とおくり名す、門生多く常に教えて曰く「医は意なり」と、即ち、病客に接するや貴賤貧富を問はず意を専誠にして、病根を搜りて苦悩を救はんことを要め、以て一家の医規となす、名声あがり衆以て医伯となす、傍ら古今の医書を博綜研究して精しく、傷寒論弁要、誠治要領、麻疹綱要、痘科提要、経穴拳要を著す室は清水氏、伯兄修道先生田中碩潤(青山を改姓)の墓側に葬った。

篤信の長子信達号節齋、鳥丸通三条上ル西側に住み父職を継いで、御医に上り正六位下出雲守に叙任せらる。維新

後、官制改変で、少典医正七位となり東京遷都に供奉し、明治四年九月職を辞して、京に帰り同十六年八月四日終る六十八歳、弟信文田中を継ぐ、妻は京町奉行与力不破氏の女、信達の男信震、父と共に宮府に勤め辞職京に帰って、漢方医で、大正七年七十歳で終った。

榕亭像贊の説明

勤儉家を治めて奥に在らず、この世間（せいかん）の寵に媚びるの人にもあらず

論語八佾篇の語よりとる

奥坐敷のある様な富貴な生活を求めるのではなく又一般庶民にこびへつらうのでもなく中流な生活に安んずるのが自分の主義である。

Summary

In Japan, the retainers of our Imperial Court had to be hereditary from some particular families, and only those from "Kuge" could get superior positions. Among them, the case of medical officers were singular. They could be picked up from the usual practicing doctors. That might be because medical officers need special ability. Here, for one example, I'll tell about the famous Fukui family.

典葉福井家略系

足利將軍高氏末子

鎌倉管領基氏孫の管領左兵衛佐滿兼弟

滿貞

篠川殿、永享十一、正月管領持氏(滿兼子)及びその子義久と共に次兄滿隆及び管領執事上杉入道禪秀氏憲の軍と鎌倉に戦ひ報国寺にて戦死(喜連川系図)
 福井家伝系図には滿貞鎌倉を遁れ京都將軍義持の許に頼り丹波餘部(テマルベ、今の龜岡市)城主となり永享五、四、七卒六十一才長興寺に葬るとす、又福井四郎を稱すとしてあるが、これは或いは後出の七世孫貞元と錯雜誤伝したもののか

貞宗

丹波守
康正二、三、四卒

五十三才

貞常

因幡守
文明十七、八、七卒

五十二才

貞教

丹波守
永正三、十一、七卒

四十二才

常照
与市郎

照重
力之助

天正三貞政以下一族戦死
貞政の幼児貞元(二才)を抱え八上城(丹波国多紀)に落ち行き後出京して六条に住み元和二、二、一、六十八才

貞兼

天正十八、二、十卒

四十八才

貞政

因幡守
天正三、二、廿九明智光秀と戦い死す

貞元
福井四郎

天正三、父貞政戦死
時に二才、一族照重に
伴はれ丹波国八上(ヤガシ)城に
おち行き後入京やがて慶長十九
エ門と称へ豊臣秀頼に属し寛永
九、十、廿死五十九才多紀大芋
郎と云う祖滿貞を福井四郎とし
てをるは或いは誤伝か

良齋

仁右エ門
一月死、十
五十才

從齋

医、立仙
元禄八、十一
月死六十八才

如齋

法橋、立
仙
享保十八
二、十八
卒、七十九才

盈齋

法橋碩安
京医声文
あり元文
四、十九
廿九才

閑齋

立安

正徳二、三、十死
七十七才

受益 寛政七相統

承順
幕府奥詰医
寛政七、九、十六卒
四十八才

母河合氏

啓発

名は幌立啓、大車、号楓亭
寛政二、十一月江戸に召さ
れ寄合格、禄二百俵に列せ
られ医学館にて「靈枢」を
講じ「集驗良方」を著す寛
政四、九、廿七死六十八才
品川東海寺長松院に葬る
(寛政系譜旧版本第七輯七九五
頁)

需

終吉、有孚、榕亭初め山本
氏、禁裏典藥寮医博士正四
後、丹波守天保十五、正、廿
一卒九十二才
「適備録」の著あり室は円
満院医江佐法橋春台女京市
中黒門元誓願寺住北野小松
原別邸墓はサガ二尊院

晋

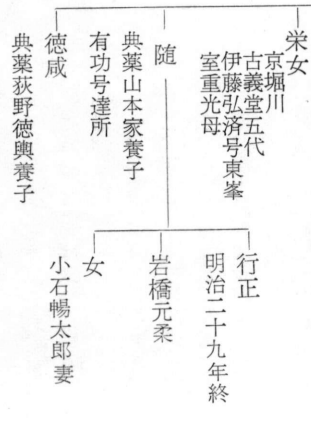
貞吉、号テイ園
典藥小允近江守
嘉永二卒六十二才
官芝築地(仁)和寺坊
官芝築地(順)女

貞憲

権医博士河内守
明治癸卯、二年新
制中典医三年辭職
宮内省奏任御用上掛
同廿一婦洛、卅三掛
死七十一才
室今大路氏

成功

貞明 明治廿五生
文学士英学
貞一 なる子
故人



日本医学史学会例会記事

六月例会 六月二十九日

於順天堂大学医学部五号館会議室

一 明治百年漢方略史年表作成余話

矢数 道明

「漢方の臨床」誌、第十五卷三号より五号に、明治以降百年間における漢方医学興亡の経過を略史年表とし、私のところにある資料写真を添え、全六十二頁にまとめて掲載した。

この仕事は、本来ならば安西先生か、石原先生にお願いしてまとめて頂くべきものと思っていたが、年頭に思い立ち、暴拳に近い短期間にまとめたので、その後補足訂正を続けている。

略史年表は終わったが、百年間の消長を一目でわかるような表現はできないものかと考え、それを材料として図表化してみようと思いついた。そこで百年を十期に分け、十年を一期として、一期ごとに出版された漢方関係の医書と、その間に結成された漢方関係各種団体とその機関誌とを一覧表とし、その数字を図表化したグラフを作った。すると明治百年間における漢方の興亡盛衰の様相が一目瞭然と書き出されてきた。

私が年表作成中、その年月日の記入に最も苦労したのは、「恩賜神農像」の祭祀変遷についてであった。そして神農像に関するいままでの記録をいろいろと集めて、彼此対照してまとめてみたところ、そのすべてを網羅した記事が、すでに安西先生によって「聖堂安置の神農像記」として「漢方の臨床」誌九卷三号に発表されていたことを知った。そこで私はこれらの変遷を年代一覧表としてまとめることにした。

次にこの度の年表作成中、「漢洋医学闘争史」の著者深川辰堂氏の編集資料が、ゲーテ精舎の平野啓司先生のところにあることを安西先生からきいていたので、これを借覽させて頂いた。予期したほどの資料はなかったが、その中で明治初期、銚子の漢方医林静齋の書いた当時の日記、「経歴漫誌」と深川氏がまとめた同じく千葉県の漢方医「石原吾道伝」の二つが興味をひいた。これらのことは大体「漢方の臨床誌」に発表することになって

いる。

- 一、明治百年漢方医書出版一覧（一五卷六号）
- 二、明治百年漢方雑誌出版一覧（一五卷八号）
- 三、恩賜神農像祭祀変遷一覧表（一五卷七号）
- 四、深川辰堂氏資料について（一五卷九号予定）

以上

「附言」 富士游先生の名著、日本医学史を引用させて頂いて居りますと明かに誤りと思われることが、いくつかあるようです。先般日本医事新報誌で公表されましたが、藤井先生の明治前日本医学史に、藤浪先生の大著医家先哲肖像集より引用して、山県大貳の肖像を香川修徳として掲げたこともありますので、これらの先人の大著の中の明らかな誤りは、日本医学史学会の名を以て訂正公表して頂けますと、後学のために幸と思われまします。でお願いいたします。

二 「蘭館日誌」に見える日本人科学者

医学者を中心として

大島蘭三郎

演者は本年二月の本学会例会の席上で「蘭館日誌」に見える西洋人科学者と題して詳したが、今回はこれの統編として表題につき調べたところを述べた。

ここにいう科学者とは厳格な意味のものではなく、いわば単なる科学愛好家も含まれている。

日本名沢野忠庵 (Christovan Ferrara) をはじめとして井上筑後守政重、西玄甫・杉本忠恵・新井白石・桂川甫筑・青木文蔵・桂川甫周・新宮涼庭・桂川甫賢・神谷源内・大槻玄沢・高橋景保らの名が「蘭館日誌」のなかに見えている。これ等の人々がいつの日記の項に見え、どのように記載されているかを調べた。

なお「蘭館日誌」一六五七年十一月十四日と五八年四月二十四日の項に見える「代官ヘイゾーの甥 Farrantagento」とあるのは日本人名をなんとすべきだろうかについてひろく教えを乞うた。

七月例会 七月十三日

於日本齒科大学第二会議室

一 幕末における宮中の御出産について

石原 明

宮中における出産については、中世の公卿の記録類にはかなり具体的な記載があり、また「御産所部類」などの編纂書もあって、ある程度の推察が可能である。しかし、江戸中期以降、とくに賀川子玄が宮中の出産に召されて以来、賀川家は産科専門の侍医として明治に至るまで宮中の出産にはほとんど関与していたにかかわらず、詳細を知ることが出来なかった。演者は賀川満崇が嘉永三年に坊城俊明の女を、賀川満載が嘉永五年に中山忠能の女、文久元年に堀川衛門内侍を、それぞれ初診から御出産が終り御七夜の祝いまで書留めた手控を入手することが出来、初診依頼の手続、妊娠決定の報告、出産前後の状況など知ることを得た。とくに嘉永五年の分は明治天皇の御生誕に当るので、貴重な記録とい

うべく、産婆の選定、食物の禁好の指示、侍医に対する応待が具体的に記録されている。あくまで満崇、満載個人の備忘録であるから、公式記録と異り、幕末における宮中の御出産の様子がかなり明かとなった。詳細は原著として報告する。

二 忍性の医療社会事業

とくにその思想的背景について

杉田 暉道

忍性は建保五年(一一一七)に大和国の磯城嶋に生まれた。十三才のとき肉食を断つことを誓ったほどで戒律の研究実践に熱心であったが、医療社会事業においては前人未踏の活躍をした。一二七四年の飢饉、一二八三年の疫病流行のときは弟子たちを動員して大活躍をした。非人の救済、病院の経営、捨子の養育など活動範囲はきわめて広いが、さらに橋をかけること一八九か所、水田開墾二二か所で一八〇町歩に及び、道路の修理が七一か所、井戸を掘ること三三か所、浴室と療病所と乞食の收容所をそれぞれ五か所つくった。また聖徳太子の業績をしのいで四天王寺に悲田院、敬田院を設けた。一二八七年に建てられた桑谷療病所では二十年間に全治者四六、八〇〇人、死亡者一〇、四五〇人で平均八割が治癒した。なほ特筆すべきは一二九八年に馬病舎を建ててい

ることである。

このような忍性の驚嘆すべき活動の源動力は何であろうか。師の敬尊によれば「慈悲」の一語につきるといふ。さらに敬尊は忍性を「慈悲が過ぎた行動」と批判している。これは日本一般の僧侶も同様に考えていたのである。この点は在俗信者が僧侶に抱く希望と、僧侶自身の考え方とはかなり相違する点である。ともか

く忍性は律宗の僧侶であるので、戒律を守るのが第一義であるとして一般の僧侶は考えていた。したがって社会事業に奉仕することによって戒律を破るということがよくないというのである。しかし忍性自身は戒律を破ったとは微塵も考えていなかった。後世において彼の業績を分析したからこそ、その事実がはっきり説明されたのである。してみると、忍性の中核をなしたものは末節の戒律を無視して、慈悲精神に生きるということであつたということが出来る。これこそ大乘仏教の理想の姿であつて、現代のわれわれが宗教家に求めている姿である。忍性の行動を批判する根底には、当時の僧侶の間には、いわゆる大乘仏教の思想が相当にくずれつつあつたとみることができないだろうか。

ついで奉仕のしかたであるが、インド以来の仏教々団の伝統によると、信者は出家修業者に対して財施を行ない、出家修業者は信者に対して法施を行なうのが常であつた。これが忍性の場合はその関係が全く交つてしまつた。信者に対して法施のみならず財施をも行なうようになった。これは仏教の日本の変化の一つであるといえる。

また奉仕活動のしかたが極めて合理的であつた。積極的に国家の諸機関を利用し、飯島の津で六浦の関米を徴収しこれを基金にして諸国の道を作り、諸国に木戸を設けて関銭をとつて橋を渡す基金とした。このような点は鎌倉仏教の開祖者よりもはるかに近代的であつた。いわば保守反動の仮面をかぶつた進歩主義者であつた。

去る六月下旬に中央公論社から「解体新書」と題する小冊子をだした、副題を「蘭学をおこした人々」としたごとく、主として蘭学勃興期の人物像を描いたもので、杉田玄白と前野良沢に特に焦点をしばつてある、解体新書の成立と、その内容の一部の吟味も述べておいた、日本の蘭学期を仮りに一七七四年より幕末までの九十年間とすると、前1/3を主にとりあつかひ、中1/3はごく僅かに、後1/3は殆んど触れていない、初めからその意図で書いたもので、決して蘭学期の全体をねらつたものではない。

解体新書の扉絵がワルエルダの解剖書のを模して作られていることは以前から知られているが、ワルエルダの解剖書にはいろいろの版があるので、じつさいに使われたのはどれかまだ最終的には決定してはいないと思う。それを調べるのは当時日本にどんな解剖書がきていたかを知ることになるので意義がある。

この「解体新書」に対してすでに数人の方から批評をいただいたが、その中でオランダ正月の図で額の像がヒポクラスを表わすと書いたことに異論があり、これはドイツの有名な外科医ハイステルであろうと中野操氏の手紙にあつた。ヒポクラテスとしたのは通説と思つて、そう書いたが、なるほど証拠がない。しかしハイステルとする理由もまだ充分でないようである。

またクルムス解剖者のラテン語本は一七三四年までにできていたはず(第七八頁)と書いたのに対して、加藤伝三郎氏よりクルムス解剖書のラテン語本は一七三二年アムステルダムで出版したものを現在持っていると言ふ御教示をうけ、そのタイトルページのコピーをいただいた、大変ありがたく思つてゐる。

以上小川鼎三氏の講演にひきつづいて、内山孝一氏が、次のよ

うな感想の言葉を寄せられた。

小川鼎三教授著「解体新書」についての感想

内山 孝一

小川鼎三教授は最近「解体新書」について中央公論新書として御書ぎになった。この本は小川博士の解剖学史の研究の一部であることはいうまでもない。新書としての性質上大部の書物ではないが、これほどまとまった解体新書についての研究はなかった。これは博士の永い間に亘る研究の結果であつて、このように詳細なこなれた表現は年輪を重ねて来てはじめて成るものである。この本が蘭学創始以前から筆を起され、解体新書そのものについてはもとより、それに関係のある内外の著書に触れ、また杉田玄白に關係のある多くの人々の事蹟と極めて興味深い挿話をもつてせられ、いつの間にかこの著書に引き入れられて興味つきないものを感じた。

今回小川博士は自著に対し自ら批評されるという日本医史学会七月例会の報に接し、その旺盛な研究の意欲に接し更に敬意を表明せずにはおれない気分になった。

それについても想ひ起されることは、ロシアの大生理学者パフロフは、それまで誰もやらなかつた条件反射という自然にはない反射を形成することにより大脳の生理学の研究に全く新しい道を開拓した。それにも拘わらず、パフロフ自らが条件反射による大脳の研究は決して万能ではないと批評している。このように、つぎることのない学究の態度に私は感動した。もとより条件反射をつくり出したことについて学究者のひとりとしてその着想の卓抜であることに敬意を表明している。

またルネッサンス時代に、人体解剖学の父といわれるアンドレアス・ヴェサルリウスのファブリカ（人体の構造についての七つの本）をはじめとして、ヴェサルリウスより更に時代の古いレオナルド・ダ・ヴィンチの解剖手稿、ヴェサルリウスの後に生理学の父といわれるウィリアム・ハーヴェーのデ・モテウ・コルディス（動物の心臓および血管の運動に関する解剖学的研究）などは、それ以後の解剖学と生理学の發達の最初をなすものであり、医学全般の進歩の基礎をなす点に文化史上の重要な意義があることはいうまでもなからう。

すなわちその頃の解剖学の研究には当然生理機能が研究されていた。時代はずつと降っているが、イギリスの生理学者として有名なラングレイ教授の自律神経系の発見は、組織学と生理学が密着した研究方法によつてはじめて明確にされた。このように形態と機能は本来は不可分のものであり、構造が機能を規定し、機能が構造を規定するという相互に規定しているという説明はなお充分ではないといつてよからう。

私はこのような立場から解体新書という十八世紀の本をみて来た。すなわち昭和七年に私は「解体新書の生理学文献としての意義」について私が学生時代に創刊した東京慈恵会医科大学文芸部の雑誌「醗酵」に書いた。解体新書の中から生理機能について記しているところが少くとも一二八箇所以上に及んでいること、そのすべてを抜き書きにするといった手数をかけてみたのであった。昭和十六年の拙著「日本科学史への反省」でも触れておいた。そして日本学士院刊行の「明治前日本文学史」第二巻に掲載された拙稿にも記すことを忘れなかつた。

医学の歴史を知らない多くの人々はクルムスのターフル・アナトミアの和訳本といわれる解体新書は解剖学の本と思っている。その通りであるが、そのころまでの解剖学という中に生理学を含んでいることを注意しておくことが親切な仕方と思っている。

その後、解剖学と生理学の内容が豊富になったために一応分れたのであるが、しかし最近になってこの二つの学をインテグレートした立場での研究に卓れた研究が多く現われはじめた。この意味で以上の二つの学の統合的研究が今や不可欠の状態となつて来た。

小川教授の近著「解体新書」を寄贈されたことよつて右に記したような感想を新たにすることができたことを、あらためて同志小川鼎三教授に感謝する次第である。

(一九六八、七、一四記す)

中野操氏日医最高優功賞受賞

本学会理事中野操博士は、このほど日医最高優功賞を受賞され、去る十一月一日、東京の日本医師会館で式典が行われた。同賞は開業医家で特に学術的貢献の顕著な者に日本医師会がおくるものである。

今回の中野理事の受賞祝賀をかねて、本学会関西支部では十一月十七日に、支部大会を開き、会後に懇親会を行った。

論文抄読

Die französische Revolution und die Medizin
Eberhard Stubler (Sudhoffs Archiv Bd. 37 p.131—139)

十九世紀の前1/3のフランス医学がドイツ医学に勝つたのは明白であり、従来この原因をフランス革命に求めて来た。しかし、著者は革命前のフランスの思想的変化を無視できないとしている。

この論文では、主に革命以前のフランス医学の状態、革命時に出された改正案について記載している。

革命前の医学教育では、十七世紀からの伝統を守ろうとするパリ医学部と新しい方針をとる Jardin des plantes や College royal 等の間で緊張が高まってきた。それに、当時の風潮の結果、偽医者が横行し、私生児が生れ、おびただしい捨子があり、それを收容する孤児院の数が他に例のないほどであった。

一七八九年、三部会が開かれた時出された陳情書の中の医学関係のものには、地方での病院、外科医、産科医の不届が訴えられていた。

医療制度の改正案は一七九〇年に初めて出されたが、それは革命前に Société royale の理事長の Vicq d'Azyr の立案したものであった。

革命後フランス医学は自然科学の医学となり、治療の面では機械的、物質的思考に基くようになったが、これは革命だけの影響でなく、それ以前からの無神論的傾向によるものであり、知と信仰の結びついたバロック時代の終りにつけている。(S・S抄)

小川鼎三著『解体新書——蘭学をおこした人々——』

片桐 一男

中公新書の一冊として『解体新書』が出版された。解剖学を専門とされる著者の、先年の好著『医学の歴史』に続く第二作である。

本書の構成は、序章 解体新書の意義、に続いて、第一章 解体新書以前、第二章 解体新書について、第三章 解体新書以後、の四章からなっている。

序章においては、安永三年（一七七四）八月、江戸の須原屋から出版された五冊本『解体新書』がわが国における本格的蘭学の開始であることを述べ、

第一章 解体新書以前においては、まず杉田玄白・前野良沢・中川淳庵らが明和八年（一七七二）三月四日刑場小塚原で刑死体の解剖を見学して、オランダ医学書の正確さに驚嘆刺戟されてターヘル・アナトミアの翻訳に着手する、決定的動機となったできごとを記述。ついで、それまでの日本における科学的人体解剖の萌芽、発達段階を述べ、日蘭関係の推移の中からオランダ語学修の開始・向上の状況をみて、前野・杉田らの翻訳の苦心を詳述。その中で前野良沢と杉田玄白のきわめて対照的な性格を追求し、かつ性格の異なる両人が前人未踏の困難な翻訳事業の推進者として協調の様子を把握することに成功している。

第二章 解体新書については、本文四冊と序・図一冊からなる『解体新書』の内容そのものを論じたもので、『解体新書』の正式の作者、解剖図を描いた小田野直武、原著者クルムスについて詳述し、由来謎の多い扉絵をめぐる内外語文献を紹介されている。この点は解体新書において新しく訳定された解剖用語・化学用語の解説、初めて輸入された神経学の諸項目とともに解剖学者神経学者小川博士にしてはじめて成った考察・評価であって、本書中最も力をそがれた部分である。

第三章 解体新書以後においては、この画期的な本格的翻訳事業の推進に協力した蘭学者達、桂川甫周・中川淳庵・石川玄常・桐山正哲・嶺春泰らに触れ、この事業が契機となって発達した蘭学と蘭学者の業績および彼ら研究者の社会を、新しい学界の成果を採り入れてまとめてある。

わが国における最初の本格的翻訳事業の成果『解体新書』の内容を考究し、この難事業をめぐる諸事情と蘭学発達の跡を豊富な人物研究の採録をもって浮き彫りにし、その中心人物前野良沢と杉田玄白の対照的性格をうまく対比することによって統一ある一書を完成することに成功された。

研究室の若い人達を連れ、楽しそうに史料探訪を重ねられて、研究者を存じている一人として、これからも是非、斯界に鋭いメスを振り、後進を導いてくださることを願ってひとまず紹介の筆を擱く。

一九六八・八・九

論文抄読

Charles Coudry ; Sir William Osler and French medicine, Medical History, Vol. XI, No.1 (1967) pp. 1—14

この論文は一九六六年七月十二日にオスラークラブで開かれたオスラー講演会でフランス語で述べられたものにもとずいている。論者はオスラーとフランス医学との関係をつぎの三つの観点から述べている。その一つはオスラー自身がフランス医学

EDWARD JENNER: The History of a medical myth by P. E. Razzell, Medical History, Vol.9, p.216—229. 1965

著者はこの論文で人痘接種と牛痘接種を比べて前者が不当に低く評価されたことに並んで牛痘接種法の発見者ジェンナーが過大に評価されてきたことを批判している。

実際に人痘接種が有効であったことは十八世紀の天然痘による死亡率がこの方法が行われて以来減少してきたことから明白である。

人痘接種の牛痘接種に比べたとき、一般にその欠点とされていることの一つに、人痘接種を受けた人間が天然痘流行の感染源となったことがある。しかし、実際にその頃の資料にあたってみると必ずしもそうではない。では何故このように云

から負うているところと二番目はマック・ジル・ベンシルヴァニア、ジョーンスホブキンス、オックスフォード等の各大学の教授たちがオスラーのフランス滞在中にオスラーと温めた友情と知的交際についてであり、三番目のものは現在のフランス医学が多くの面でオスラー個人に負うているところである。オスラーがフランス医学から影響を受けていることが多いことはあらゆる面でも実証できるが、思想上でもフランス哲学の影響を多分に蒙り、またルネッサンス時代からのフランス医学からもすくなくからず教ええられている。(大島蘭三郎)

われるに至ったのかというのに、著者はロンドンの統計資料をもとにして結論を出したためであるという。この資料では人口の増加、出生率の増加が考慮されていなかったのである。

第二の欠点に接種場所以外にも膿疱ができることをあげているが、これはサットンの人痘接種の改良法を用いた例にはみられなかった。一方ジェンナーの牛痘法でも初期にはその発生をみた記録が残っている。これができるのは天然痘ウィルスの濃度によるものとしている。

人痘法の最大の欠点は接種後に死亡する危険のあることであるが、十八世紀末から十九世紀初頭にかけての記録によると死亡例はほとんど零に近い。又、死亡者を見るところは流行の発生している地方である。従って人痘接種による死亡と断定しがたいという。

以上のように十八世紀末は人痘接種法が改良されて、その欠

点が補正されてきた時期であったにもかかわらず牛痘接種法の発見でこの方法の価値が低くみられてしまった。しかし、この方法の長所は免疫が牛痘接種で得たものより長く持続することであり、非常に優れた方法といわねばならない。従ってジェンナーに対する従来の評価はあまりにも高くされすぎ不適當であ

Joseph Needham : Science and Society in East and West, Centaurus, Vol.10, No.3 (1994)
pp. 174—197

科学史家として令名あるニードム教授の「東西両洋における科学と社会」と題する論文である。同氏は一九五四年以降に出版された Science and Civilisation in China, 7 volumes,

Cambridge University Press の著者としてよく知られている。本篇はその要旨の一部を述べたものといえるであろう。一世紀から一五世紀までの永いあいだシナ文明が西洋のものより実地応用の学問でいっそう進んでいたのに、近代科学が何故にシナで発達せず、欧州でだけそれが起ったことをつきとめようとしたもので、注目すべき内容に満ちている。抄録をつくるには適しないので、興味ふかい数コの箇所をとり出してみる。

一 シナの古代国家は皇帝(宮廷)と貴族的な官吏の群が上に立ち、世襲的でないエリートの人により運営された。支配されるものは比較的自治をいとむ農民階級である。政府は税をとり立て、強制労役を課する。その代りに国家は全域の防衛

という。

この論文に対して全く反対の立場をとる A. W. Downie M. D., F. R. S. の見解と更にそれに対して著者が行った反論がつけ加えられている。(S・S抄)

につとめ、公共事業ごとに大河の保全、灌漑、運河をつくること等をする。シナ文化史では最大の英雄は治水の技術者であった。塩と鉄の専売は一五世紀にはじまり、一二世紀には完成した。漢代には酒類の統制がなされた。

二、科挙の制度は二〇〇〇年以上にわたり、優秀な頭脳をみつけて国家の用に宛てた。欧州では官吏登用の試験制度が中世の初期に少し行われたが、シナのごとく大きいスケールで徹底的なものは他になく。

三、シナでは儒学を修めた文官が政治の衝にあたり、武人は多くのばあい引っこんでいた。シナ人は the Sword might win, but only the Logos could keep を確信してゐる。

四、シナはいつの時代も一党一國であり、その党は儒教派であった。決して皇帝の独裁政治ではない。

五、シナでは古代から欧州とちがい奴隸制度がない。シナの航海術は進んでいたが古代エジプトとちがい多数の人間の労力により船を動かしたのではない。手押し車は西洋では一三世紀前には知られなかったが、シナでは三世紀にすでに普及していた。

六、二〇〇〇年の歴史を通じてシナは官僚封建制 bureaucratic

eudalism であり、これが近代科学と資本主義の発達を全く抑へつけた。欧州の急速な近代化はガリレオ時代からであるが、その発展の基になった磁力の科学は全く non-European のもの

Martin Schrenk ; Die Angina Pectoris, Sudhoffs Archiv, Bd. 51, H.2 (Juli.1967). S.165—183

著者は南独フライブルグ大学の医史学教室の人である。狭心症 Angina pectoris を最初に命名したのは英国の William Heberden (1710—1801) であり、その発表は一七六八年になされたことは諸書の記すところであるが、本篇ではその時代の心臓病学がいかに内容貧弱であったかがまず指摘されている。Harvey の血液循環説が一六二八年にでもその後一〇〇年間は心臓の学問はさっぱり進歩せず、Senac 一七四九年の著者がでて初めて曙光をみたのである。

Heberden は一七六八年七月二日にロンドンの学会で演説し、そのとき Angina pectoris の語を用い、四年後の一七七二年にその演説内容が印刷に付せられた。まもなく一七七二年四月一六日付でロンドンの医師 N. N. (という匿名) が手紙を Heberden に書いた。N. N. は自分がその病気にかかっているのので、死んだら解剖してくれとあった。その人が五月の初めに死んで、John Hunter の執刀で剖割がなされた。そのとき心臓とその壁の血管は何らの変化をしていない。ということが Heberden により発表された。J. Hunter は一七七三年から狭

心で、一二世紀まで欧州ではそれに関する話がなかった。シナで発見され、その知識が西方に伝わったのである。(T・O)

心症のつよい発作におそわれ、二〇年後の一七九三年にその病気で急死したが、剖見で左の心臓に梗塞、冠状動脈の硬化がみられた。種痘法の発見で名だかい Ed. Jenner はすでに一七八年に狭心症で死んだ人を解剖して冠状動脈に a state of bony tube を認め、Heberden あての手紙に書いた。しかし師匠の Hunter の死後までその公表をさしひかえた。冠状動脈の骨化は Senac がすでに (一七四九) 書いていたのである。

Heberden が一八〇一年に死んだ頃にはすでに五〇人ほどが狭心症について論文をだしていた。一九世紀の研究でますます狭心症は冠状動脈や心臓筋の変化に結びつけて考えられる傾向がつよくなったが Friedrich Tiedemann (一八四三) や Armand Trousseau (一八六八) のときは器質的变化に重きをおくことに反対した。

フランスの Nicolas Francois Rougnon de Magny が Heberden の最初の発表と同年ながら少し早く (一七六八、二、二三) 狭心症について書いたので、Rougnon をその発見者とする説がある (一八〇八年 Bunnés が初めてそのことを指摘した)。

結論として現在の傾向は狭心症を単に Angina cordis と考えるのでなく、もっと広い意味で、心身相関の方向でみることであり、またそれが大切なことである。(T・O)

実験生理学の祖伏屋素狄の建碑

「オランダ医話」〔文化二（一八〇五）刊の書名は既に「幕末の西洋学家訳述目録」〔嘉永二（一八五二）刊〕に見えており、上下二巻二冊本であるが如何なる理由か流布本少なく手近かに見られなかったためか学界にも知られず、又、この書の著者伏屋素狄についても唯大阪の一蘭医といった程度解ったまま昭和の近年まで過ぎてきたのである。

本会の内山孝一前理事長がこの書中の記述を精密周到に研究して、生理学の専門家の立場からこの書は素狄の独創による実験生理学的研究を述べたもので価値頗る大なることを推称し、初めて発表した（日本医史学雑誌 第五巻 昭和29年）。

これが端緒となって素狄の出生が大坂府下であることもあって本会の関西支部の中野操、三木栄等の再検討、追究が行われて素狄の血統後裔の許で新たに発見された解剖図等に依り素狄に関する多くの知見がまとめられて発表された（「医譚」第7号素狄研究特集）。

この殆んど今迄知られなかった先哲医家の陰功を何とか顕彰しようとの議は地元大阪に於ても屢々話題に上ったが昭和42年漸く具眼化し、幸いに縁故の地大阪市西区堀江の名利和光寺境内の好地を同寺伏見誓寛尼住職の提供御承諾を得て内山首唱の下に建碑の議となり同年10月恰かも小川理事長と羽倉敬尚評議員西下の機に在阪同学とも謀り、又現場を下見し同11月左記撰文の建碑の除幕式が修められた。左に碑文を掲げる。

実験生理学の祖伏屋素狄（一七四七—一八一二）碑

泉北郡南池田村万町の旧家にて元禄の前頃万葉学者僧契沖を世話した文化人伏屋重賢の分家の後で、琴坂と号し橋本曇齋大矢高齋各務文献齋藤方策と交わり蘭方医学を修め寛政十二年四月大阪の刑場葭島で女刑屍を解剖しまた屢々動物実験を試み「和蘭医話」を著して達見を発表した。通称を万町権之進と云ひ初め堺に医業を開き後に大阪堀江に移り文化八年十一月廿六日終つたが墓が失はれたからゆかりの地に近い北堀江の名刹あみだ池和光寺に碑を立つ

昭和四十二年十一月建つ

發起 日本医史学会及び同生理学会有志

賛助 日本医師会、大阪府医師会

当日は首唱者内山西下、大阪支部中野、三木、阿知波、長門谷、宗田大阪大生理学教授及び学生等約30名出席し伏見住職様の献茶読経に続いて懐旧談が交され、名医素狄も茲に初めて現代に広く紹介せられる糸口が開かれた観であった。

この建碑にあたって本会員の他日本医師会、大阪府医師会の賛助寄資をいただいた。筆末ながら記して厚く謝意を表する。

（羽倉敬尚）

日本医史学会々則

第一条 本会は日本医史学会と称する。

第二条 本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条 本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかす。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展覧などを行なう。

四、日本の医史学を代表して内外関係學術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条 本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条 会員は会費とすて年額一五〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条 本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、評議員、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事および評議員はそれぞれ若干名とし理事会および評議員会は本会の重要な事項を議決する。

評議員は普通会员の中より、理事会および総会の議を経て理事長が推せんする。

理事は評議員の中より評議員会の推せんにより

理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は会員より理事長が任命する。

六、役員任期は二年とし重任を妨げない。(ただし会長を除く)

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条 本会の事務所は順天堂大学医学部医史学教授室内

(東京都文京区本郷二の一)に置く。

第八条 本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第九条 会則の変更は総会の承認を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回(一月、四月、七月、十月末日)とする。

締切は発行月の二か月前とする

投稿資格 原則として本会会員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表

題、著者名のつぎに英文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに英文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数 表題、著者名、本文(表、図版等を除く)で三

印刷ページ(四百字原稿用紙で大体七枚)までは無料とし、それを越えた分は一印刷ページあたり二〇〇〇円を著者の負担とする。

校正 原著については初校を著者校正とし、二校以後

は編集部にて行なう。

別刷 投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別

刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送先 東京都文京区本郷二丁目の一

順天堂大学医学部医史学教授室内 日本医史学

会

編集委員 大鳥蘭三郎(委員長) 石原明 杉田暉道 大

塚恭男 酒井シツ

日本医史学会役員氏名 (五十音順)

理事長 小川 鼎三
 会長 鈴木 勝
 副会長 今田 見信
 常任理事 石原 明 大鳥蘭三郎
 理事

安西 安周 赤松 金芳 阿知波五郎
 今田 見信 石川 光昭 内山 孝一
 梅沢彦太郎 大久保利謙 大塚 敬節
 大矢 全節 緒方 富雄 岡西 為人
 蒲原 宏 佐藤 美実 杉 靖三郎
 鈴木 正夫 鈴木 勝 宗田 一
 竹内 薫兵 津崎 孝道 戸近太郎
 中野 操 平塚 俊亮 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系

評議員
 安芸 基雄 石田 憲吾 今市 正義
 岩治 勇一 王丸 勇 大塚 恭男
 金城 清松 久志木常孝 鮫島 近二
 清水藤太郎 杉田 暉道 高山 担三
 田中 助一 津田 進三 中泉 行五
 中沢 修 中山 沃 長門谷
 服部 敏良 福島 義一 藤野
 丸山 博 松

三廻 俊一 山形 敏一 山田 平太
 幹事 大塚 恭男 酒井 シヅ 杉田 暉道
 谷津 三雄

「日本医史学雑誌」の
 バックナンバーについて

日本医史学雑誌五巻一号(復刊一号)―
 昭和二九年―から十三巻四号―昭和四二年
 ーまでのバックナンバー揃いを一万三千五
 百円、一巻を千五百円、一号を四百円の会
 員価格で頒布しています。御希望の方は日
 本医史学会事務所宛に申込み下さい。

賛助会制度の発足について

今年の医史学会総会での決定に従って、
 賛助会員の制度を漸く具体化したしまし
 て、本会の趣旨に御賛同頂いた次のいくつ
 かの会社に早速会員になって頂きました。

日本医事新報社、医歯薬出版株式会社、
 金原出版株式会社、医学書院、平凡社、国
 際書房、武田薬工、藤沢薬工、エーザイ、

日本C、
 ンガー・ゾーンの各株

後記

大分子定よりおくりてしまいましたが、こ
 こに第十四巻三号をおおくりいたします。今
 年中に第四号を何とか発行できるようにと思
 っております。

本年最終号には、第十四巻総目録と他誌所
 載の医史学関係論文の目録を掲載するつもり
 しております。
 (Y・O)

昭和四十三年十一月二十五日 印刷
 昭和四十三年十一月三十日 発行
 日本医史学雑誌
 第十四巻 第三号
 編集者代表 大 鳥 蘭 三 郎
 発行者 小 川 鼎 三
 印刷者 柏 原 義 治
 発行所 日 本 医 史 学 会
 東京都文京区本郷一ノ二
 順天堂大学医学部医史学
 教室内
 郵便 番号 一 一 三 番
 振替 東京 一 五 二 五 〇 番

朝夕一杯！ 中将湯が

貴方の健康をととのえます

婦人良薬

中将湯

150円・300円

頭痛・肩こり・
生理痛・生理
めまい・産前産
更年期障害に

17種の薬草を一錠に

中将湯の錠剤

コムール

200円・500円・1000円



株式会社津村順天堂
東京都中央区日本橋通3～8

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 14. No. 3

JNov. 1968

CONTENTS

Original articles

Shuntai mine - A Biographical Note Tomio Ogata ... (1)

From a General Description on Some Families of
Medical Profession for the Imperial Court

- On One of them, "Family Furui" Keisho Hahura ... (50)

Notes from monthly meetings (58)

Miscellaneous (63)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo.